求む。
二〇 願くは永遠の契約の血によりて、羊の大牧者となれる我らの主イエスを、死
人の中より引上げ給ひし平和の神、二一 その悦びたまふ所を、イエス・キリストに由
りて我らの衷に行ひ、御意を行はしめん爲に凡ての善き事につきて、汝らを全うし
給はんことを。世々限りなく榮光、かれに在れ、アアメン。
二二 兄弟よ、請ふ我が勸の言を容れよ、我なんぢらに手短く書き贈りたるなり。
二三 なんぢら知れ、我らの兄弟テモテは釋されたり。彼もし速かに來らば、我かれと
偕に汝らを見ん。
二四 汝らの凡ての導く者、および凡ての聖徒に安否を問へ。イタリヤの人々、な
んぢらに安否を問ふ。
二五 願くは恩惠、なんぢら衆と偕に在らんことを。

ヤコブの書

第一章

一 神および主イエス・キリストの僕ヤコブ、散り居る十二の族の平安
を祈る。
二 わが兄弟よ、なんぢら各樣の試錬に遭ふとき、只管これを歡喜とせよ。三 そ
は汝らの信仰の驗は、忍耐を生ずるを知ればなり。四 忍耐をして全き活動をなさし
めよ。これ汝らが全く、かつ備りて缺くる所なからん爲なり。
五 汝らの中もし知慧の缺くる者あらば、咎むることなく、また惜む事なく、凡
ての人に與ふる神に求むべし、然らば與へられん。六 但し疑ふことなく、信仰をも
て求むべし。疑ふ者は、風に動かされて飜へる海の波のごときなり。七 斯る人は、
主より何物をも受くと思ふな。八 斯る人は、二心にして凡てその歩むところの途、
定りなし。
九 卑き兄弟は、おのが高くせられたるを喜べ、一〇 富める者は、おのが卑くせら
れたるを喜べ。そは草の花のごとく、過ぎゆくべければなり。一一 日出で熱き風吹き
て草を枯らせば、花落ちて、その麗しき姿ほろぶ。富める者もまた斯のごとく、そ
の途の半にして己まづ消失せん。
一二 試錬に耐ふる者は幸福なり、之を善しとせらるる時は、主のおのれを愛する

者に、約束し給ひし生命の冠冕を受くべければなり。一三人、誘はるるとき『神われを誘ひたまふ』と言ふな、神は惡に誘はれ給はず、又みづから人を誘ひ給ふことなし。一四人の誘はるるは己の慾に引かれて惑さるるなり。一五慾孕みて罪を生み、罪成りて死を生む。一六わが愛する兄弟よ、自ら欺くな。一七凡ての善き賜物と凡ての全き賜物とは、上より、もろもろの光の父より降るなり。父は變ることなく、また回轉の影もなき者なり。一八その造り給へる物の中にて我らを初穂のごとき者たらしめんとて、御旨のままに眞理の言をもて、我らを生み給へり。

一九わが愛する兄弟よ、汝らは之を知る。されば、おのおの聽くことを速かにし、語ることを遲くし、怒ることを遲くせよ。二〇人の怒は神の義を行はざればなり。二一然れば凡ての穢と溢るる惡とを捨て、柔和をもて其の植ゑられたる所の、靈魂を救ひ得る言を受けよ。二二ただ御言を聞くのみにして、己を欺く者とならず、之を行ふ者となれ。二三それ御言を聞くのみにして、之を行はぬ者は、鏡にて己が生來の顏を見る人に似たり。二四己をうつし見て立ち去れば、直ちにその如何なる姿なりしかを忘る。二五されど全き律法、すなはち自由の律法を懇ろに見て離れぬ者は、業を行ふ者にして、聞きて忘るる者にあらず、その行爲によりて幸福ならん。

二六人もし自ら信心ふかき者と思ひて、その舌に轡を著けず、己が心を欺かば、その信心は空しきなり。二七父なる神の前に潔くして穢なき信心は、孤兒と寡婦とをその患難の時に見舞ひ、また自ら守りて世に汚されぬ是なり。

第二章

一わが兄弟よ、榮光の主なる我らの主イエス・キリストに對する信仰を保たんには、人を偏り視るな。二金の指輪をはめ、華美なる衣を著たる人、なんぢらの會堂に入りきたり、また粗末なる衣を著たる貧しき者、いり來らんに、三汝等その華美なる衣を著たる人を重んじ視て『なんぢ此の善き處に坐せよ』と言ひ、また貧しき者に『なんぢ彼處に立つか、又はわが足下に坐せよ』と言はば、四汝らの中にて區別をなし、また惡しき思をもてる審判人となるに非ずや。五わが愛する兄弟よ、聽け、神は世の貧しき者を選びて信仰に富ませ、神を愛する者に約束し給ひし國の世嗣たらしめ給ひしに非ずや。六然るに汝らは貧しき者を輕んじたり、汝らを虐げ、また裁判所に曳くものは、富める者にあらずや。七彼らは汝らの上に稱へらるる尊き名を汚すものに非ずや。八汝等もし聖書にある『おのれの如く汝の隣を愛すべし』との尊き律法を全うせば、その爲すところ善し。九されど若し人を偏り視ば、これ罪を行ふなり。律法、なんぢらを犯罪者と定めん。一〇人、

律法全體を守るとも、その一つに躓かば、是すべてを犯すなり。一一 それ『姦淫する勿れ』と宣給ひし者、また『殺す勿れ』と宣給ひたれば、なんぢ姦淫せずとも、若し人を殺さば律法を破る者となるなり、一二 なんぢら自由の律法によりて審かれんとする者のごとく語り、かつ行ふべし。一三 憐憫を行はぬ者は、憐憫なき審判を受けん、憐憫は審判にむかひて勝ち誇るなり。

一四 わが兄弟よ、人みづから信仰ありと言ひて、もし行爲なくば何の益かあらん、斯る信仰は彼を救ひ得んや。一五 もし兄弟或は姉妹、裸體にて日用の食物に乏しからんとき、一六 汝等のうち、或人これに『安らかにして往け、溫かなれ、飽くことを得よ』といひて體に無くてならぬ物を與へずば、何の益かあらん。一七 斯のごとく信仰もし行爲なくば、死にたる者なり。一八 人もまた言はん『なんぢ信仰あり、われ行爲あり、汝の行爲なき信仰を我に示せ、我わが行爲によりて信仰を汝に示さん』と。一九 なんぢ神は唯一なりと信ずるか、斯く信ずるは善し、惡鬼も亦信じて慄けり、二〇 ああ虛しき人よ、なんぢ行爲なき信仰の徒然なるを知らんと欲するか。二一 我らの父アブラハムはその子イサクを祭壇に獻げしとき行爲によりて義とせられたるに非ずや。二二 なんぢ見るべし、その信仰、行爲と共にはたらき、行爲によりて

全うせられたるを。二三 またアブラハム神を信じ、その信仰を義と認められたりと云へる聖書は成就し、かつ彼は神の友と稱へられたり。二四 斯く人の義とせらるるは、ただ信仰のみに由らずして行爲に由ることは、汝らの見る所なり。二五 また遊女ラハブも使者を受け、これを他の途より去らせたるとき行爲によりて義とせられたるに非ずや。二六 靈魂なき體の死にたる者なるが如く、行爲なき信仰も死にたるものなり。

第三章

一 わが兄弟よ、なんぢら多く教師となるな。教師たる我らの更に嚴しき審判を受くることを、汝ら知ればなり。二 我らは皆しばしば躓く者なり、人もし言に蹉跌なくば、これ全き人にして全身に轡を著け得るなり。三 われら馬を己に馴はせんために轡をその口に置くときは、その全身を馭し得るなり。四 また船を見よ、その形は大く、かつ激しき風に追はるるとも、最小き舵にて舵人の欲するままに運すなり。五 斯のごとく舌もまた小きものなれど、その誇るところ大なり。視よ、いかに小き火の、いかに大なる林を燃すかを。六 舌は火なり、不義の世界なり、舌は我らの肢體の中にて、全身を汚し、また地獄より燃出でて一生の車輪を燃すものなり。七 獸・鳥・匍ふもの・海にあるもの等、さまざまの種類みな

制せらる、既に人に制せられたり。八 されど誰も舌を制すること能はず、舌は動きて止まぬ惡にして死の毒の滿つるものなり。九 われら之をもて主たる父を讃め、また之をもて神に象りて造られたる人を詛ふ。一〇 讃美と呪詛と同じ口より出づ。わが兄弟よ、斯る事はあるべきにあらず。一一 泉は同じ穴より甘き水と苦き水とを出さんや。一二 わが兄弟よ、無花果の樹、オリブの實を結び、葡萄の樹、無花果の實を結ぶことを得んや。斯のごとく鹽水は甘き水を出すこと能はず。

一三 汝等のうち智くして慧き者は誰なるか、その人は善き行狀により柔和なる智慧をもて行爲を顯すべし。一四 されど汝等もし心のうちに苦き妬と黨派心とを懷かば、誇るな、眞理に悖りて僞るな。一五 斯る智慧は上より下るにあらず、地に屬し、情慾に屬し、惡鬼に屬するものなり。一六 妬と黨派心とある所には亂と各樣の惡しき業とあればなり。一七 されど上よりの智慧は第一に潔よく、次に平和・寛容・溫順また憐憫と善き果とに滿ち、人を偏り視ず、虛僞なきものなり。一八 義の果は平和をおこなふ者の平和をもて播くに因るなり。

第四章

一 汝等のうちの戰爭は何處よりか、分爭は何處よりか、汝らの肢體のうちに戰ふ慾より來るにあらずや。二 汝ら貪れども得ず、殺すことを

なし、妬むことを爲れども得ること能はず、汝らは爭ひ、また戰す。汝らの得ざるは求めざるに因りてなり。三 汝ら求めてなほ受けざるは慾のために費さんとて妄に求むるが故なり。四 姦淫をおこなふ者よ、世の友となるは、神に敵するなるを知らぬか、誰にても世の友とならんと欲する者は、己を神の敵とするなり。五 聖書に『神は我らの衷に住ませ給ひし靈を、妬むほどに慕ひたまふ』と云へるを虛しきこととと汝ら思ふか。六 神は更に大なる恩惠を賜ふ。されば言ふ『神は高ぶる者を拒ぎ、謙だる者に恩惠を與へ給ふ』と。七 この故に汝ら神に服へ、惡魔に立ち向へ、さらば彼なんぢらを逃げ去らん。八 神に近づけ、さらば神なんぢらに近づき給はん。罪人よ、手を淨めよ、二心の者よ、心を潔よくせよ。九 なんぢら惱め、悲しめ、泣け、なんぢらの笑を悲歎に、なんぢらの歡喜を憂に易へよ。一〇 主の前に己を卑うせよ、然らば主なんぢらを高うし給はん。

一一 兄弟よ、互に謗るな、兄弟を謗る者、兄弟を審く者は、これ律法を誹り、律法を審くなり。汝もし律法を審かば、律法をおこなふ者にあらずして審判人なり。一二 立法者また審判者は唯一人にして、救ふことをも滅すことをも爲し得るなり。なんぢ誰なれば隣を審くか。

一三 聽け『われら今日もしくは明日それがしの町に往きて一年の間かしこに留り賣買して利を得ん』と言ふ者よ、一四 汝らは明日のことを知らず、汝らの生命は何ぞ、暫く現れて遂に消ゆる霧なり。一五 汝等その言ふところに易へて『主の御意ならば、我ら活きて此のこと、或は彼のことを爲さん』と言ふべきなり。一六 然れど今なんぢらは高ぶりて誇る、斯のごとき誇はみな惡しきなり。一七 人、善を行ふことを知りて之を行はぬは罪なり。

第五章

一 聽け、富める者よ、なんぢらの上に來らんとする艱難のために泣きさけべ。二 汝らの財は朽ち、汝らの衣は蠹み、三 汝らの金銀は錆びたり。この錆、なんぢらに對ひて證をなし、かつ火のごとく汝らの肉を蝕はん。汝等この末の世に在りてなほ財を蓄へたり。四 視よ、汝等がその畑を刈り入れたる勞動人に拂はざりし値は叫び、その刈りし者の呼聲は萬軍の主の耳に入れり。五 汝らは地にて奢り、樂しみ、屠らるる日に在りて尙おのが心を飽せり。六 汝らは正しき者を罪に定め、且これを殺せり、彼は汝らに抵抗することなし。七 兄弟よ、主の來り給ふまで耐忍べ。視よ農夫は地の貴き實を、前と後との雨を得るまで耐忍びて待つなり。八 汝らも耐忍べ、なんぢらの心を堅うせよ。主の來

り給ふこと近づきたればなり。九 兄弟よ、互に怨言をいふな、恐らくは審かれん。視よ審判主、門の前に立ちたまふ。一〇 兄弟よ、主の名によりて語りし預言者たちを苦難と耐忍との模範とせよ。一一 視よ、我らは忍ぶ者を幸福なりと思ふ。なんぢらヨブの忍耐を聞けり、主の彼に成し給ひし果を見たり、則ち主は慈悲ふかく、かつ憐憫あるものなり。一二 わが兄弟よ、何事よりも先づ誓ふな、或は天、あるひは地、あるひは其の他のものを指して誓ふな。只なんぢら然りは然り否は否とせよ、罪に定めらるる事なからん爲なり。一三 汝等のうち苦しむ者あるか、その人、祈せよ。喜ぶ者あるか、その人、讃美せよ。一四 汝等のうち病める者あるか、その人、教會の長老たちを招け。彼らは主の名により其の人に油をぬりて祈るべし。一五 さらば信仰の祈は病める者を救はん、主かれを起し給はん、もし罪を犯し事あらば赦されん。一六 この故に互に罪を言ひ表し、かつ癒されんために相互に祈れ、正しき人の祈ははたらきて大なる力あり。一七 エリヤは我らと同じ情をもてる人なるに、雨降らざることを切に祈りしかば三年六个月のあひだ地に雨降らざりき。一八 斯て再び祈りたれば、天雨を降し、地その果

を生ぜり。
一九　わが兄弟よ、汝等のうち眞理より迷ふ者あらんに、誰か之を引回さば、二〇　その人は知れ、罪人をその迷へる道より引回す者は、かれの靈魂を死より救ひ、多くの罪を掩ふことを。

ペテロの前の書

第一章

一　イエス・キリストの使徒ペテロ、書をポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジヤ、ビテニヤに散りて宿れる者、二　即ち父なる神の預じめ知り給ふところに隨ひて御靈の潔により柔順ならんため、イエス・キリストの血の灑を受けんために選ばれたる者に贈る。願くは恩惠と平安と汝らに增さんことを。
三　讃むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、その大なる憐憫に隨ひ、イエス・キリストの死人の中より甦へり給へることに由り、我らを新に生れしめて生ける望を懷かせ、四　汝らの爲に天に蓄へある朽ちず、汚れず、萎まざる嗣業

を繼しめ給へり。五　汝らは終のときに顯れんとて備りたる救を得んために、信仰によりて神の力に護らるるなり。六　この故に汝ら今暫しの程さまざまの試煉によりて憂へざるを得ずとも、なほ大に喜べり。七　汝らの信仰の驗は壞る金の火にためさるるよりも貴くして、イエス・キリストの現れ給ふとき譽と光榮と尊貴とを得べきなり。八　汝らイエスを見しことなけれど、之を愛し、今見ざれども、之を信じて言ひがたく、かつ光榮ある喜悅をもて喜ぶ。九　これ信仰の極、すなはち靈魂の救を受くるに因る。一〇　汝らの受くべき恩惠を預言したる預言者たちは、この救につきて具に尋ね査べたり。一一　即ち彼らは己が中に在すキリストの靈の、キリストの受くべき苦難および其の後の榮光を預じめ證して、何時のころ如何なる時を示し給ひしかを査べたり。一二　彼等はその勤むるところ己のためにあらず、汝らの爲なることを默示によりて知れり。即ち天より遣され給へる聖靈によりて福音を宣ぶる者どもの、汝らに傳へたる所にして、御使たちも之を懇ろに視んと欲するなり。
一三　この故に、なんぢら心の腰に帶し、愼みてイエス・キリストの現れ給ふときに與へられんとする恩惠を疑はずして望め。一四　從順なる子等の如くして、前の無知なりし時の慾に效はず、一五　汝らを召し給ひし聖者に效ひて自ら凡ての行狀に潔

かれ。一六 錄して、『われ聖なれば、汝らも聖なるべし』とあればなり。一七 また偏ることなく各人の業に隨ひて審きたまふ者を父と呼ばば畏をもて世に寓る時を過せ。一八 なんぢらが先祖等より傳はりたる虛しき行狀より贖はれしは、銀や金のごとき朽つる物に由るにあらず、一九 瑕なく汚點なき羔羊の如きキリストの貴き血に由ることを知ればなり。二〇 彼は世の創の前より預じめ知られたまひしが、この末の世に現れ給へり。二一 これは彼を死人の中より甦へらせて之に榮光を與へ給ひし神を、彼によりて信ずる汝らの爲なり、この故に汝らの信仰と希望とは神に由れり。二二 なんぢら眞理に從ふによりて靈魂をきよめ、僞りなく兄弟を愛するに至りたれば、心より熱く相愛せよ。二三 汝らは朽つる種に由らで朽つることなき種、すなはち神の活ける限りなく保つ言に由りて新に生れたればなり。二四 『人はみな草のごとく、その光榮はみな草の花の如し、草は枯れ、花は落つ。二五 されど主の御言は永遠に保つなり』汝らに宣傳へたる福音の言は卽ちこれなり。

第二章

一 されば凡ての惡意、すべての詭計・僞善・嫉妬および凡ての謗を棄てて、二 いま生れし嬰兒のごとく靈の眞の乳を慕へ、之により育ちて救に至らん爲なり。三 なんぢら既に主の仁慈あることを味ひ知りたらんには、然す

べきなり。四 主は人に棄てられ給へど、神に選ばれたる貴き活ける石なり。五 なんぢら彼にきたり、活ける石のごとく建られて靈の家となれ。これ潔き祭司となり、イエス・キリストに由りて神に喜ばるる靈の犧牲を獻げん爲なり。六 聖書に『視よ、選ばれたる貴き隅の首石を我シオンに置く。之に依り賴む者は辱しめられじ』とあるなり。七 されば信ずる汝らには、尊きなれど、信ぜぬ者には『造家者らの棄てたる石は、隅の首石となれる』にて、八 『つまづく石、礙ぐる岩』となるなり。彼らは服はぬに因りて御言に躓く。これは斯く定められたるなり。九 されど汝らは選ばれたる族、王なる祭司・潔き國人・神に屬ける民なり、これ汝らを暗黑より召して、己の妙なる光に入れ給ひし者の譽を顯させん爲なり。一〇 なんぢら前には民にあらざりしが、今は神の民なり。前には憐憫を蒙らざりしが、今は憐憫を蒙れり。

一一 愛する者よ、われ汝らに勸む。汝らは旅人また宿れる者なれば、靈魂に逆ひて戰ふ肉の慾を避け、一二 異邦人の中にありて行狀を美しく爲よ、これ汝らを謗りて惡をおこなふ者と云へる人々の汝らの善き行爲を見て反つて眷顧の日に神を崇めん爲なり。

一三 なんぢら主のために凡て人の立てたる制度に服へ。或は上に在る王、一四 或は

惡をおこなふ者を罰し、善をおこなふ者を賞せんために王より遣されたる司に服へ。一五 善を行ひて愚なる人の無知の言を止むるは、神の御意なればなり。一六 なんぢら自由なる者のごとく爲すとも、その自由をもて惡の覆となさず、神の僕のごとく爲よ。一七 なんぢら凡ての人を敬ひ、兄弟を愛し、神を畏れ、王を尊べ。

一八 僕たる者よ、大なる畏をもて主人に服へ、啻に善きもの、寛容なる者にのみならず、情なき者にも服へ、一九 人もし受くべからざる苦難を受け、神を認むるに因りて憂に堪ふる事をせば、これ譽むべきなり。二〇 もし罪を犯して撻たるるとき、之を忍ぶとも何の功かある。然れど若し善を行ひてなほ苦しめらるる時これを忍ばば、これ神の譽めたまふ所なり。二一 汝らは之がために召されたり、キリストも汝らの爲に苦難をうけ、汝らを其の足跡に隨はしめんとて模範を遺し給へるなり。二二 彼は罪を犯さず、その口に虛僞なく、二三 また罵られて罵らず、苦しめられて脅かさず、正しく審きたまふ者に己を委ね、二四 木の上に懸りて、みづから我らの罪を己が身に負ひ給へり。これ我らが罪に就きて死に、義に就きて生きん爲なり。汝らは彼の傷によりて癒されたり。二五 なんぢら前には羊のごとく迷ひたりしが、今は汝らの靈魂の牧者たる監督に歸りたり。

第三章

二 妻たる者よ、汝らもその夫に服へ。たとひ御言に遵はぬ夫ありとも、汝らの潔く、かつ恭敬しき行狀を見て、言によらず妻の行狀によりて救に入らん爲なり。三 汝らは髮を辮み、金をかけ、衣服を裝ふごとき表面のものを飾とせず、四 心のうちの隱れたる人、すなはち柔和、恬靜なる靈の朽ちぬ物を飾とすべし、是こそは神の前にて價貴きものなれ。五 むかし神に望を置きたる潔き女等も、斯の如くその夫に服ひて己を飾りたり。六 卽ちサラがアブラハムを主と呼びて之に服ひし如し。汝らも善を行ひて何事にも戰き懼れずばサラの子たるなり。七 夫たる者よ、汝らその妻を己より弱き器の如くし、知識にしたがひて偕に棲み、生命の恩惠を共に嗣ぐ者として之を貴べ。これ汝らの祈に妨害なからん爲なり。

八 終に言ふ、汝らみな心を同じうし互に思ひ遣り、兄弟を愛し、憐み、謙遜り、九 惡をもて惡に、謗をもて謗に報ゆることなく、反つて之を祝福せよ。汝らの召されたるは祝福を嗣がん爲なればなり。一〇 『生命を愛し、善き日を送らんとする者は、舌を抑へて惡を避け、一一 口唇を抑へて虛僞を語らず、惡より遠ざかりて善をおこなひ、平和を求めて之を追ふべし。一二 それ主の目は義人の上に止まり、その耳は

彼らの祈に傾く。されど主の御顔は悪をおこなふ者に向ふ』

一三 汝等もし善に熱心ならば誰か汝らを害はん。一四 たとひ義のために苦しめらるる事ありとも、汝ら幸福なり『彼らの威嚇を懼るな、また心を騒がすな』一五 心の中にキリストを主と崇めよ、また汝らの衷にある望の理由を問ふ人には、柔和と畏懼とをもて常に辯明すべき準備をなし、一六 かつ善き良心を保て。これ汝等のキリストに在りて行ふ善き行狀を罵る者の、その謗ることに就きて自ら愧ぢん爲なり。一七 もし善をおこなひて苦難を受くること神の御意ならば、悪を行ひて苦難を受くるに勝るなり。一八 キリストも汝らを神に近づかせんとて正しきもの、正しからぬ者に代りて一たび罪のために死に給へり、彼は肉體にて殺され、靈にて生かされ給へるなり。一九 また靈にて往き、獄にある靈に宣傳へたまへり。二〇 これらの靈は昔ノアの時代に方舟の備へらるるあひだ寛容をもて神の待ち給へるとき、服はざりし者どもなり、その方舟に入り水を經て救はれし者は、僅にしてただ八人なりき。二一 その水に象れるバプテスマは肉の汚穢を除くにあらず、善き良心の神に對する要求にしてイエス・キリストの復活によりて今なんぢらを救ふ。二二 彼は天に昇りて神の右に在す。御使たち及びもろもろの權威と能力とは彼に服ふなり。

第四章

一 キリスト肉體にて苦難を受け給ひたれば、汝らも亦おなじ心をもて自ら鎧へ。—肉體にて苦難を受くる者は罪を止むるなり— 二 これ今よりのち、人の慾に從はず、神の御意に從ひて肉體に寓れる殘の時を過さん爲なり。三 なんぢら過ぎにし日は、異邦人の好む所をおこなひ、好色・慾情・酩酊・宴樂・暴飲・律法にかなはぬ偶像崇拜に歩みて、もはや足れり。四 彼らは汝らの己とともに放蕩の極に走らぬを怪しみて譏るなり。五 彼らは生ける者と死にたる者とを審く準備をなし給へる者に己のことを陳ぶべし。六 福音の、死にたる者に宣傳へられしは、彼らが肉體にて人のごとく審かれ、靈にて神のごとく生きん爲なり。

七 萬の物のをはり近づけり、然れば汝ら心を慥にし、愼みて祈せよ。八 何事よりも先づ互に熱く相愛せよ。愛は多くの罪を掩へばなり。九 また咨むことなく互に懇ろに待せ。一〇 神のさまざまの恩惠を掌どる善き家司のごとく各人その受けし賜物をもて互に事へよ。一一 もし語るならば、神の言をかたる者のごとく語り、事ふるならば、神の與へたまふ能力を受けたる者のごとく事へよ。是イエス・キリストによりて事々に神の崇められ給はん爲なり。榮光と權力とは世々限りなく彼に歸するなり、アアメン。

一二 愛する者よ、汝らを試みんとて來れる火のごとき試煉を異なる事として怪し
まず、一三 反つてキリストの苦難に與れば、與るほど喜べ、なんぢら彼の榮光の顯れ
ん時にも喜び樂しまん爲なり。一四 もし汝等キリストの名のために謗られなば幸福な
り。榮光の御靈すなはち神の御靈なんぢらの上に留まり給へばなり。一五 汝等のうち
誰にても或は殺人、あるひは盜人、あるひは惡を行ふ者、あるひは安に他人の事に
干渉する者となりて苦難に遭ふな。一六 されど若しキリステアンたるをもて苦難を受
けなば、之を恥づることなく、反つて此の名によりて神を崇めよ。一七 既に時いたれ
り、審判は神の家より始まるべし。まづ我等より始まるとせば、神の福音に從はざ
る者のその結局は如何ぞや。一八 義人もし辛うじて救はるるならば、不敬虔なるも
の、罪ある者は何處にか立たん。一九 されば神の御意に從ひて苦難を受くる者は善を
行ひて己が靈魂を眞實なる造物主にゆだね奉るべし。

第五章

一 われ汝らの中なる長老たちに勸む（我は汝らと同じく長老たる者、
またキリストの苦難の證人、顯れんとする榮光に與る者なり）二 汝ら
の中にある神の群羊を牧へ。止むを得ずして爲さず、神に從ひて心より爲し、利を
貪るために爲さず、悅びてなし、三 委ねられたる者の主とならず、群羊の模範とな

れ。四 さらば大牧者の現れ給ふとき、萎まざる光榮の冠冕を受けん。五 若き者よ、
なんぢら長老たちに服へ、かつ皆たがひに謙遜をまとへ『神は高ぶる者を拒ぎ、謙
だる者に恩惠を與へ給ふ』六 この故に神の能力ある御手の下に己を卑うせよ、然ら
ば時に及びて神なんぢらを高うし給はん。七 又もろもろの心勞を神に委ねよ、神な
んぢらの爲に慮ばかり給へばなり。八 愼みて目を覺しをれ、汝らの仇なる惡魔、ほ
ゆる獅子のごとく歷廻りて呑むべきものを尋ぬ。九 なんぢら信仰を堅うして彼を禦
げ、なんぢらは世にある兄弟たちの同じ苦難に遭ふを知ればなり。一〇 もろもろの
恩惠の神、すなはち永遠の榮光を受けしめんとて、キリストによりて汝らを召し給
へる神は、汝らが暫く苦難をうくる後、なんぢらを全うし、堅うし、强くして、そ
の基を定め給はん。一一 願くは權力世々限りなく神にあれ、アァメン。
一二 われ忠實なる兄弟なりと思ふシルワノに由りて簡單に書贈りて汝らに勸め、
かつ此は神の眞の恩惠なることを證す、汝等この恩惠に立て。一三 汝らと共に選ばれ
てバビロンに在る教會、なんぢらに安否を問ふ、わが子マルコも安否を問ふ。一四 な
んぢら愛の接吻をもて互に安否を問へ。
願くはキリストに在る汝ら衆に、平安あらんことを。

ペテロの後の書

第一章

一　イエス・キリストの僕また使徒なるシメオン・ペテロ、書を我らの神、および救主イエス・キリストの義によりて我らと同じ貴き信仰を受けたる者に贈る。二　願くは神および我らの主イエスを知るによりて恩恵と平安と汝らに増さんことを。

三　キリストの神たる能力は、生命と敬虔とに係る凡てのものを我らに賜へり。是おのれの榮光と德とをもて召し給へる者を我ら知るに因りてなり。四　その榮光と德とによりて我らに貴き大なる約束を賜へり、これは汝らが世に在る慾の滅亡をのがれ、神の性質に與る者とならん爲なり。五　この故に勵み勉めて汝らの信仰に德を加へ、德に知識を、六　知識に節制を、節制に忍耐を、忍耐に敬虔を、七　敬虔に兄弟の愛を、兄弟の愛に博愛を加へよ。八　此等のもの汝らの衷にありて彌増すときは、汝等われらの主イエス・キリストを知に怠ることなく、實を結ばぬこと無きに至らん。九　此等のものの無きは盲人にして遠く見ること能はず、己が舊き罪を潔められしことを忘れたるなり。一〇　この故に兄弟よ、ますます勵みて汝らの召されたること、選ばれたることを堅うせよ。若し此等のことを行はば、躓くことなからん。一一　斯て汝らは我らの主なる救主イエス・キリストの永遠の國に入る恩惠を豐に與へられん。

一二　されば汝らは此等のことを知り、既に受けたる眞理に堅うせられたれど、我つねに此等のことを思ひ出させんと爲るなり。一三　我は尙この幕屋に居るあひだ、汝らに思ひ出させて勵すを正當なりと思ふ。一四　そは我らの主イエス・キリストの我に示し給へるごとく、我わが幕屋を脫ぎ去ることの速かなるを知ればなり。一五　我また汝等をして我が世を去らん後にも常に此等のことを思ひ出させんと勉むべし。一六　我らは我らの主イエス・キリストの能力と來りたまふ事とを汝らに告ぐるに、巧なる造り話を用ひざりき、我らは親しくその稜威を見し者なり。一七　甚も貴き榮光の中より聲出でて『こは我が愛しむ子なり、我これを悅ぶ』と言ひ給へるとき、主は父なる神より尊貴と榮光とを受け給へり。一八　我らも彼と偕に聖なる山に在りしとき、天より出づる此の聲をきけり。一九　斯て我らが有てる預言の言は堅うせられたり。汝等この言を暗き處にかがやく燈火として、夜明け、明星の汝らの心の中にいづるまで顧みるは善し。二〇　なんぢら先づ知れ、聖書の預言は、すべて己がままに釋くべき

ものにあらぬを。二 預言は人の心より出でしにあらず、人々聖靈に動され、神によりて語れるものなればなり。

第二章

一 されど民のうちに僞預言者おこりき、その如く汝らの中にも僞教師あらん。彼らは滅亡にいたる異端を持ち入れ、己らを買ひ給ひし主をさへ否みて速かなる滅亡を自ら招くなり。二 また多くの人かれらの好色に隨はん、之によりて眞の道は譏らるべし。三 彼らは貪慾によりて飾言を設け、汝等より利をとらん。彼らの審判は古へより定められたれば遲からず、その滅亡は寢ねず。四 神は罪を犯しし御使たちを赦さずして地獄に投げいれ、之を黑闇の穴におきて審判の時まで看守し、五 また古き世を容さずして、ただ義の宣傳者なるノアと他の七人とをのみ護り、敬虔ならぬ者の世に洪水を來らせ、六 またソドムとゴモラとの町を滅亡に定めて灰となし、後の不敬虔をおこなふ者の鑑とし、七 ただ無法の者どもの好色の擧動を憂ひし正しきロトのみを救ひ給へり。（八 この正しき人は彼らの中に住みて日々その不法の行爲を見聞して己が正しき心を傷めたり）九 かく主は敬虔なる者を試煉の中より救ひ、また正しからぬ者を審判の日まで看守して之を罰し、一〇 別けて、肉に隨ひて、汚れたる情慾のうちを歩み、權ある者を輕んずる者を罰するこ

とを知り給ふ。この曹輩は膽太く放縱にして尊き者どもを譏りて畏れぬなり。一一 御使等はかの尊き者どもに勝りて大なる權勢と能力とあれど、彼らを主の御前に譏り訴ふることを爲ず。一二 然れど、かの曹輩は恰も捕へられ屠らるるために生れたる辨別なき生物のごとし、知らぬことを譏り、不義の價をえて必ず亡さるべし。一三 彼らは晝もなほ酒食を快樂とし誘惑を樂しみ、汝らと共に宴席に與りて汚點となり、瑕となる。一四 その目は淫婦にて滿ち罪に飽くことなし、彼らは靈魂の定まらぬ者を惑し、その心は貪慾に慣れて呪詛の子たり。一五 彼らは正しき道を離れて迷ひいで、ベオルの子バラムの道に隨へり。バラムは不義の報を愛して、一六 その不法を咎められたり。物言はぬ驢馬、人の聲して語り、かの預言者の狂を止めたればなり。一七 この曹輩は水なき井なり、颶風に逐はるる雲霧なり、黑き闇かれらの爲に備へられたり。一八 彼らは虛しき誇をかたり、迷の中にある者等より辛うじて遁れたる者を肉の慾と好色とをもて惑はし、一九 之に自由を與ふることを約すれど、自己は滅亡の奴隸たり、敗くる者は勝つ者に奴隸とせらるればなり。二〇 彼等もし主なる救主イエス・キリストを知るによりて世の汚穢をのがれしのち復これに纏はれて敗くる時はその後の狀は前よりもなほ惡しくなるなり。二一 義の道を知りて、その傳へられたる聖な

る誡命を去り往かんよりは、寧ろ義の道を知らぬを勝れりとす。三 俚諺に『犬おのが吐きたる物に歸り來り、豚身を洗ひてまた泥の中に轉ぶ』と云へるは眞にして、能く彼らに當れり。

第三章

一 愛する者よ、われ今この第二の書を汝らに書き贈り、第一なると之とをもて汝らに思ひ出させ、その潔よき心を勵まし、二 聖なる預言者たちの預じめ云ひし言、および汝らの使徒たちの傳へし主なる救主の誡命を憶えさせんとす。三 汝等まづ知れ、末の世には嘲ける者嘲笑をもて來り、おのが慾に隨ひて歩み、四 かつ言はん『主の來りたまふ約束は何處にありや、先祖たちの眠りしのち萬のもの開闢の初と等しくして變らざるなり』と。五 彼らは殊更に次の事を知らざるなり、卽ち古へ神の言によりて天あり、地は水より出で水によりて成立ちしが、六 その時の世は之により水に淹れて滅びたり。七 されど同じ御言によりて今の天と地とは蓄へられ、火にて燒かれん爲に敬虔ならぬ人々の審判と滅亡との日まで保たるるなり。

八 愛する者よ、なんぢら此の一事を忘るな。主の御前には一日は千年のごとく、千年は一日のごとし。九 主その約束を果すに遲きは、或人の遲しと思ふが如き

にあらず、ただ一人の亡ぶるをも望み給はず、凡ての人の悔改に至らんことを望みて汝らを永く忍び給ふなり。一〇 されど主の日は盜人のごとく來らん、その日には天とどろきて去り、もろもろの天體は燒け崩れ、地とその中にある工とは燒け盡きん。一一 斯く此等のものはみな崩るべければ、汝等いかに潔き行狀と敬虔とをもて、神の日の來るを待ち之を速かにせんことを勉むべきにあらずや、その日には天燃え崩れ、もろもろの天體燒け溶けん。一三 されど我らは神の約束によりて義の住むところの新しき天と新しき地とを待つ。

一四 この故に愛する者よ、汝等これを待てば神の前に汚點なく瑕なく安然に在らんことを勉めよ。一五 且われらの主の寛容を救なりと思へ、これは我らの愛する兄弟パウロもその與へられたる智慧にしたがひ曾て汝らに書き贈りし如し。一六 彼はその凡ての書にも此等のことに就きて語る、その中には悟りがたき所あり、無學のもの、心の定まらぬ者は、他の聖書のごとく之をも强ひ釋きて自ら滅亡を招くなり。

一七 されば愛する者よ、なんぢら預じめ之を知れば、愼みて無法の者の迷にさそはれて己が堅き心を失はず、一八 ますます我らの主なる救主イエス・キリストの恩寵と主を知る知識とに進め。願くは今および永遠の日までも榮光かれに在らんことを。

ヨハネの第一の書

第一章

一 太初より有りし所のもの、我らが聞きしところ、目にて見し所、つらつら視て手觸りし所のもの、即ち生命の言につきて、二 ――この生命すでに顯れ、われら之を見て證をなし、その曾て父と偕に在して今われらに顯れ給へる永遠の生命を汝らに告ぐ――三 我らの見しところ、聞きし所を汝らに告ぐ、これ汝等をも我らの交際に與らしめん爲なり。我らは父および其の子イエス・キリストの交際に與るなり。四 此等のことを書き贈るは、我らの喜悅の滿ちん爲なり。

五 我らが彼より聞きて、また汝らに告ぐる音信は是なり、即ち神は光にして少しの暗き所なし。六 もし神と交際ありと言ひて暗きうちを歩まば、我ら僞りて眞理を行はざるなり。七 もし神の光のうちに在すごとく光のうちを歩まば、我ら互に交際を得、また其の子イエスの血、すべての罪より我らを潔む。八 もし罪なしと言はば、是みづから欺けるにて眞理われらの中になし。九 もし己の罪を言ひあらはさば、神は眞實にして正しければ、我らの罪を赦し、凡ての不義より我らを潔め給はん。一〇 もし罪を犯したる事なしといはば、これ神を僞者とするなり、神の言われらの中になし。

第二章

一 わが若子よ、これらの事を書き贈るは、汝らが罪を犯さざらん爲なり。人もし罪を犯さば、我等のために父の前に助主あり、即ち義なるイエス・キリストなり。二 彼は我らの罪のみならず、また全世界の爲なり。三 我らその誡命を守らば、之によりて彼を知ることを自ら悟る。四 『われ彼を知る』と言ひて其の誡命を守らぬ者は僞者にして眞理その衷になし。五 その御言を守る者は誠に神の愛、その衷に全うせらる。之によりて我ら彼に在ることを悟る。六 彼に居ると言ふ者は、彼の歩み給ひしごとく自ら歩むべきなり。

七 愛する者よ、わが汝らに書き贈るは、新しき誡命にあらず、汝らが初より有てる舊き誡命なり。この舊き誡命は汝らが聞きし所の言なり。八 然れど我が汝らに書き贈るところは、また新しき誡命にして、主にも汝らにも眞なり、その故は眞の光すでに照りて、暗黑はややに過ぎ去ればなり。九 光に在りと言ひて其の兄弟を憎むものは今もなほ暗黑にあるなり。一〇 その兄弟を愛する者は光に居りて顚躓その衷

になし。一一 その兄弟を憎む者は暗黒にあり、暗きうちを歩みて己が往くところを知らず、これ暗黒はその眼を矇ましたればなり。

一二 若子よ、我この書を汝らに贈るは、なんぢら主の御名によりて罪を赦されたるに因る。一三 父たちよ、我この書を汝らに贈るは、汝ら太初より在す者を知りたるに因る。若き者よ、我この書を汝らに贈るは、なんぢら悪しき者に勝ちたるに因る。一四 子供よ、我この書を汝らに贈りたるは、汝ら御父を知りたるに因る。父たちよ、我この書を汝らに贈りたるは、汝ら太初より在す者を知りたるに因る。若き者よ、我この書を汝らに贈りたるは、汝ら強くかつ神の言その衷に留り、また悪しき者に勝ちたるに因る。一五 なんぢら世をも世にある物をも愛すな。人もし世を愛せば、御父を愛する愛その衷になし。一六 おほよそ世にあるもの、卽ち肉の慾・眼の慾・所有の誇などは、御父より出づるにあらず、世より出づるなり。一七 世と世の慾とは過ぎ往く、然れど神の御意をおこなふ者は永遠に存るなり。

一八 子供よ、今は末の時なり、汝らが非キリスト來らんと聞きしごとく、今や非キリスト多く起れり、之によりて我等その末の時なるを知る。一九 彼らは我等より出でゆきたれど、固より我等のものに非ざりき。我らの屬ならば、我らと共に留りし

ならん。然れど、その出でゆきしは、皆われらの屬ならぬことの顯れん爲なり。

二〇 汝らは聖なる者より油を注がれたれば、凡ての事を知る。二一 我この書を汝らに贈るは、汝ら眞理を知らぬ故にあらず、眞理を知り、かつ凡ての虛僞の眞理より出ぬことを知るに因る。二二 僞者は誰なるか、イエスのキリストなるを否む者にあらずや。御父と御子とを否む者は非キリストなり。二三 凡そ御子を否む者は御父をも有たず、御子を言ひあらはす者は御父をも有つなり。二四 初より聞きし所を汝らの衷に居らしめよ。初より聞きし所を汝らの衷に居らば、汝らも御子と御父とに居らん。二五 我らに約し給ひし約束は是なり、卽ち永遠の生命なり。二六 汝らを惑す者どもに就きて我これらの事を書き贈る。二七 なんぢらの衷には、主より注がれたる油とどまる故に、人の汝らに物を教ふる要なし。此の油は汝らに凡ての事を教へ、かつ眞にして虛僞なし、汝等はその教へしごとく主に居るなり。二八 されば若子よ、主に居れ。これ主の現れ給ふときに臆することなく、其の來り給ふときに恥づることなからん爲なり。二九 なんぢら主を正しと知らば、凡て正義をおこなふ者の主より生れたることを知らん。

第三章

一 視よ、父の我らに賜ひし愛の如何に大なるかを。我ら神の子と稱へ

らる。既に神の子たり、世の我らを知らぬは、父を知らぬによりてなり。二愛する
者よ、我等いま神の子たり、後いかん、未だ顕れず、主の現れたまふ時われら之に
肖んことを知る。我らその眞の狀を見るべければなり。三凡て主による此の希望を
懷く者は、その淸きがごとく己を潔くす。四すべて罪をおこなふ者は不法を行ふな
り、罪は卽ち不法なり。五汝らは知る、主の現れ給ひしは、罪を除かん爲なるを。
主には罪あることなし。六おほよそ主に居る者は罪を犯さず、おほよそ罪を犯す者
は未だ主を見ず、主を知らぬなり。七若子よ、人に惑さるな、義をおこなふ者は義
人なり、卽ち主の義なるがごとし。八罪を行ふものは惡魔より出づ、惡魔は初より
罪を犯せばなり。神の子の現れ給ひしは、惡魔の業を毀たん爲なり。九凡て神より
生るる者は罪を行はず、神の種、その衷に止まるに由る。彼は神より生るる故に罪
を犯すこと能はず。一〇之に由りて神の子と惡魔の子とは明かなり。おほよそ義を行
はぬ者および己が兄弟を愛せぬ者は神より出づるにあらず。一一われら互に相愛すべ
きは汝らが初より聞きし音信なり。一二カインに效ふな、彼は惡しき者より出でて己
が兄弟を殺せり。何故ころしたるか、己が行爲は惡しく、その兄弟の行爲は正しか
りしに因る。

一三兄弟よ、世は汝らを憎むとも怪しむな。一四われら兄弟を愛するによりて、死
より生命に移りしを知る、愛せぬ者は死のうちに居る。一五おほよそ兄弟を憎む者は
卽ち人を殺す者なり、凡そ人を殺す者の、その內に永遠の生命なきを汝らは知る。
一六主は我らの爲に生命を捨てたまへり、之によりて愛といふことを知りたり、我等
もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。一七世の財寶をもちて兄弟の窮乏を見、反
つて憐憫の心を閉づる者はいかで神の愛その衷にあらんや。一八若子よ、われら言と
舌とをもて相愛することなく、行爲と眞實とをもて爲べし。一九之に由りて我ら眞理
より出でしを知り、且われらの心われらを責むるとも神の前に心を安んずべし。
二〇神は我らの心よりも大にして一切のことを知り給へばなり。二一愛する者よ、我ら
が心みづから責むる所なくば、神に向ひて懼れなし。二二且すべて求むる所を神より
受くべし。是その誡命を守りて御心にかなふ所を行へばなり。二三その誡命はこれな
り、卽ち我ら神の子イエス・キリストの名を信じ、その命じ給ひしごとく互に相愛
すべきことなり。二四神の誡命を守る者は神に居り、神もまた彼に居給ふ。我らその
賜ふところの御靈に由りて其の我らに居給ふことを知るなり。

第四章

一愛する者よ、凡ての靈を信ずな、その靈の神より出づるか否かを試

みよ。多くの僞預言者、世に出でたればなり。二 凡そイエス・キリストの肉體にて來り給ひしことを言ひあらはす靈は神より出づ、なんぢら之によりて神の御靈を知るべし。三 凡そイエスを言ひ表はさぬ靈は神より出でしに非ず、これは非キリストの靈なり。その來ることは汝ら聞けり、この靈いま既に世にあり。四 若子よ、汝らは神より出でし者にして既に彼らに勝てり。汝らに居給ふ者は世に居る者よりも大なればなり。五 彼らは世より出でし者なり、之によりて世の事をかたり、世も亦かれらに聽く。六 我らは神より出でし者なり。神を知る者は、我らに聽き、神より出でぬ者は、我らに聽かず、之によりて眞理の靈と迷謬の靈とを知る。

七 愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、おほよそ愛ある者は、神より生れ、神を知るなり。八 愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。九 神の愛われらに顯れたり。神はその生み給へる獨子を世に遣し、我等をして彼によりて生命を得しめ給ふに因る。一〇 愛といふは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥の供物となし給ひし是なり。一一 愛する者よ、斯のごとく神われらを愛し給ひたれば、我らも亦たがひに相愛すべし。一二 未だ神を見し者あらず、我等もし互に相愛せば、神われらに在し、その愛も亦われ

れらに全うせらる。一三 神、御靈を賜ひしに因りて我ら神に居り、神われらに居給ふことを知る。一四 又われら父のその子を遣して世の救主となし給ひしを見て、その證をなすなり。一五 凡そイエスを神の子と言ひあらはす者は神かれに居り、かれ神に居る。一六 我らに對する神の愛を我ら既に知り、かつ信ず。神は愛なり、愛に居る者は神に居り、神も亦かれに居給ふ。一七 斯く我らの愛、完全をえて審判の日に懼なからしむ。我等この世にありて主の如くなるに因る。一八 愛には懼なし、全き愛は懼を除く、懼には苦痛あればなり。懼るる者は、愛いまだ全からず。一九 我らの愛するは、神まづ我らを愛し給ふによる。二〇 人もし『われ神を愛す』と言ひて、その兄弟を憎まば、これ僞者なり。既に見るところの兄弟を愛せぬ者は、未だ見ぬ神を愛することを能はず。二一 神を愛する者は亦その兄弟をも愛すべし。我等この誡命を神より受けたり。

第五章

一 凡そイエスをキリストと信ずる者は、神より生れたるなり。おほよそ之を生み給ひし神を愛する者は、神より生れたる者をも愛す。二 我等もし神を愛して、その誡命を行はば之によりて神の子供を愛することを知る。三 神の誡命を守るは卽ち神を愛するなり、而してその誡命は難からず。四 おほよそ

神より生るる者は世に勝つ、世に勝つ勝利は我らの信仰なり。五 世に勝つものは誰ぞ、イエスを神の子と信ずる者にあらずや。六 これ水と血とに由りて來り給ひしなり。七 證する者は御靈なり。御靈は眞理なればなり。八 證する者は三つ、御靈と水と血となり。この三つ合ひて一つとなる。九 我等もし人の證を受けんには、神の證は更に大なり。神の證はその子につきて證し給ひし是なり。一〇 神の子を信ずる者はその衷にこの證をもち、神を信ぜぬ者は神を僞者とす。これ神その子につきて證せし證を信ぜぬが故なり。一一 その證はこれなり、神は永遠の生命を我らに賜へり、この生命はその子にあり。一二 御子をもつ者は生命をもち、神の子をもたぬ者は生命をもたず。

一三 われ神の子の名を信ずる汝らに此等のことを書贈るは、汝らに自ら永遠の生命を有つことを知らしめん爲なり。一四 我らが神に向ひて確信する所は是なり、即ち御意にかなふ事を求めば、必ず聽き給ふ。一五 斯く求むるところ、何事にても聽き給ふと知れば、求めし願を得たる事をも知るなり。一六 人もし其の兄弟の死に至らぬ罪を犯すを見ば、神に求むべし。然らば彼に、死に至らぬ罪を犯す人々に生命を與

へ給はん。死に至る罪あり、我これに就きて請ふべしと言はず。一七 凡ての不義は罪なり、されど死に至らぬ罪あり。

一八 凡て神より生れたる者の罪を犯さぬことを我らは知る。神より生れ給ひし者、これを守りたまふ故に、惡しきもの觸るる事をせざるなり。一九 我らは神より出で全世界は惡しき者に屬するを我らは知る。二〇 また神の子すでに來りて我らに眞の者を知る知識を賜ひしを我らは知る。而して我らは眞の者に居り、その子イエス・キリストに居るなり、彼は眞の神にして永遠の生命なり。二一 若子よ、自ら守りて偶像に遠ざかれ。

ヨハネの第二の書

一 長老、書を選ばれたる婦人および其の子供に贈る。われ眞をもて汝らを愛す。二 啻に我のみならず、凡て眞理を知る者はみな汝らを愛す。三 これは我らの衷に止りて永遠に偕にあらんとする眞理に因りてなり。三 父なる神および父の子イエ

ス・キリストより賜ふ恩惠と憐憫と平安とは、眞と愛との中にて我らと偕にあらん。

四 われ汝の子供のうちに、我らが父より誡命を受けし如く眞理に循ひて歩む者あるを見て甚だ喜べり。 五 婦人よ、われ今なんぢに願ふは、我らが互に相愛すべき事なり。これは新しき誡命を書贈るにあらず、我らが初より有てる誡命なり。 六 彼の誡命に循ひて歩むは卽ち愛なり、汝らが初より聞きしごとく愛に歩むは卽ち誡命なり。 七 人を惑すもの多く世にいでイエス・キリストの肉體にて來り給ひしことを言ひ表さず、斯る者は人を惑す者にして、非キリストなり。 八 なんぢら我らが働きし所を空しくせず、滿ち足れる報を得んために自ら心せよ。 九 凡そキリストの教に居らずして、之を越えゆく者は神を有たず、キリストの教にをる者は父と子とを有つなり。 一〇 人もし此の教を有たずして汝らに來らば、之を家に入るな、安かれと言ふな。 一一 之に安かれと言ふ者は、その惡しき行爲に與するなり。

一二 我なほ汝らに書贈ること多くあれど、紙と墨とにて爲るを好まず、我らの歡喜を充さんために汝等にいたり、顏をあはせて語らんことを望む。 一三 選ばれたる汝の姉妹の子供、なんぢに安否を問ふ。

ヨハネの第三の書

一 長老、書を愛するガイオ、わが眞をもて愛する者に贈る。

二 愛する者よ、我なんぢが靈魂の榮ゆるごとく汝すべての事に榮え、かつ健かならんことを祈る。 三 兄弟たち來りて汝が眞理を保つこと、卽ち眞理に循ひて歩むことを證したれば、われ甚だ喜べり。 四 我には我が子供の、眞理に循ひて歩むことを聞くより大なる喜悅はなし。

五 愛する者よ、なんぢ旅人なる兄弟等にまで行ふ所みな忠實をもて爲せり。 六 かれら教會の前にて汝の愛につきて證せり。なんぢ神の御意に適ふやうに彼らを見送らば、その行ふところ善からん。 七 彼らは異邦人より何をも受けずして御名のために旅立せり。 八 されば斯る人を助くべきなり、我らも彼らと共に眞理のために働く者とならん爲なり。

九 われ曩に聊か教會に書きおくれり。然れど彼らの中に長たらんと欲するデオテレペス我らを受けず。 一〇 この故に我もし往かば、その行へる業を思ひ出させん。彼は惡しき言をもて我らを罵り、なほ足れりとせずして自ら兄弟たちを接けず、之

を接けんとする者をも拒みて教會より逐ひ出す。
一一 愛する者よ、悪に效ふな、善にならへ。善をおこなふ者は神より出で、悪をおこなふ者は未だ神を見ざるなり。一二 デメテリオは凡ての人にも眞理にも證せらる。我等もまた證す、なんぢ我らの證の眞なるを知る。
一三 我なほ汝に書贈ること多くあれど墨と筆とにて爲るを欲せず、速かに汝を見、たがひに顔をあはせて語らんことを望む。一四 汝に平安あれ、朋友たち安否を問ふ。なんぢ名をさして友たちに安否を問へ。

ユダの書

一 イエス・キリストの僕にしてヤコブの兄弟なるユダ、書を召されたる者、すなはち父なる神に愛せられ、イエス・キリストの爲に守らるる者に贈る。二 願くは、憐憫と平安と愛と、なんぢらに增さんことを。
三 愛する者よ、われ我らが共に與る救につき勵みて汝らに書贈らんとせしが、

聖徒の一たび傳へられたる信仰のために戰はんことを勸むる書を、汝らに贈るを必要と思へり。四 そは敬虔ならずして我らの神の恩惠を好色に易へ、唯一の主なる我らの主イエス・キリストを否むものども潛入りたればなり。彼らが此の審判を受くべきことは昔より預じめ錄されたり。
五 汝らは固より凡ての事を知れど、我さらに汝等をして思ひ出さしめんとする事あり、即ち主エジプトの地より民を救ひ出して、後に信ぜぬ者を亡し給へり。六 又おのが位を保たずして己が居所を離れたる御使を、大なる日の審判まで闇黑のうちに長久の繩目をもて看守し給へり。七 ソドム、ゴモラ及びその周圍の町々も亦これと同じく、淫行に耽り、背倫の肉慾に走り、永遠の火の刑罰をうけて鑑とせられたり。八 斯のごとく、かの夢見る者どもも肉を汚し、權威ある者を輕んじ、尊き者を罵る。九 御使の長ミカエル惡魔と論じてモーセの屍體を爭ひし時に敢て罵りて審かず、唯『ねがはくは主なんぢを戒め給はんことを』と云へり。一〇 されど此の人人は知らぬことを罵り、無知の獸のごとく、自然に知る所によりて亡ぶるなり。
一一 禍害なるかな、彼らはカインの道にゆき、利のためにバラムの迷に走り、またコラの如き謀反によりて亡びたり。一二 彼らは汝らと共に宴席に與り、その愛餐の暗礁

たり、憚らずして自己をやしなふ牧者、風に逐はるる水なき雲、枯れて又かれ、根より拔かれたる果なき秋の木、一三おのが恥を湧き出す海のあらき波、さまよふ星なり。彼らの爲に暗き闇、とこしへに蓄へ置かれたり。一四アダムより七代に當るエノク彼らに就きて預言せり。曰く『視よ、主はその聖なる千萬の衆を率ゐて來りたまへり。一五これ凡ての人の審判をなし、すべて敬虔ならぬ者の不敬虔を行ひたる不敬虔の凡ての業と、敬虔ならぬ罪人の、主に逆ひて語りたる凡ての甚だしき言とを責め給はんとてなり』一六彼らは呟くもの、不滿をならす者にして、己が慾に隨ひて歩み、口に誇をかたり、利のために人に諂ふなり。

一七愛する者よ、汝らは我らの主イエス・キリストの使徒たちの預じめ云ひし言を憶えよ。一八すなはち汝らに曰らく『末の時に嘲る者おこり己が不敬虔なる慾に隨ひて歩まん』と。一九彼らは分裂をなし、情慾に屬し、御靈を有たぬ者なり。二〇されど愛する者よ、なんぢらは己が甚潔き信仰の上に德を建て、聖靈によりて祈り、二一神の愛のうちに己をまもり、永遠の生命を得るまで我らの主イエス・キリストの憐憫を待て。二二また彼らの中なる疑ふ者をあはれみ二三或者を火より取出して救ひ、或者をその肉に汚れたる下衣をも厭ひ、かつ懼れつつ憐め。

二四願くは汝らを守りて躓かしめず、瑕なくして榮光の御前に歡喜をもて立つことを得しめ給ふ者、二五すなはち我らの救主なる唯一の神に榮光・稜威・權力・權威、われらの主イエス・キリストに由りて萬世の前にも今も萬世までも在らんことを、アメン。

ヨハネの默示錄

第一章

一これイエス・キリストの默示なり。即ち、かならず速かに起るべき事を、その僕どもに顯させんとて、神の彼に與へしものなるを、彼その使を僕ヨハネに遣して示し給へるなり。二ヨハネは神の言とイエス・キリストの證とに就きて、その見しところを悉とく證せり。三此の預言の言を讀む者と之を聽きて其の中に錄されたることを守る者等とは幸福なり、時近ければなり。

四ヨハネ書をアジヤに在る七つの教會に贈る。願くは今在し、昔在し、後來りたまふ者および其の御座の前にある七つの靈、五また忠實なる證人、死人の中より

最先に生れ給ひしもの、地の諸王の君なるイエス・キリストより賜ふ恩惠と平安と汝らに在らんことを。願くは我らを愛し、その血をもて我らを罪より解放ち、六われらを其の父なる神のために國民となし祭司となし給へる者に世々限りなく榮光と權力とあらんことを、アアメン。七視よ、彼は雲の中にありて來りたまふ、諸衆の目、殊に彼を刺したる者これを見ん、かつ地上の諸族みな彼の故に歎かん、然り、アアメン。

八今いまし、昔いまし、後きたり給ふ主なる全能の神いひ給ふ『我はアルパなり、オメガなり』

九汝らの兄弟にして汝らと共にイエスの艱難と國と忍耐とに與る我ヨハネ、神の言とイエスの證との爲にパトモスといふ島に在りき。一〇われ主日に御靈に感じゐたるに、我が後にラッパのごとき大なる聲を聞けり。一一曰く『なんぢの見る所のことを書に錄してエペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオデキヤに在る七つの教會に贈れ』一二われ振反りて我に語る聲を見んとし、振反り見れば七つの金の燈臺あり。一三また燈臺の間に人の子のごとき者ありて足まで垂るる衣を著、胸に金の帶を束ね、一四その頭と頭髮とは白き毛のごとく雪のごと

く白く、その目は燄のごとく、一五その足は爐にて燒きたる輝ける眞鍮のごとく、その聲は衆の水の聲のごとし。一六その右の手に七つの星を持ち、その口より兩刃の利き劍いで、その顏は烈しく照る日のごとし。一七我これを見しとき其の足下に倒れて死にたる者の如くなれり。彼その右の手を我に按きて言ひたまふ『懼るな、我は最先なり、最後なり、一八活ける者なり、われ曾て死にたりしが、視よ世々限りなく生く。また死と陰府との鍵を有てり。一九されば汝が見しことと今あることと、後に成らんとする事とを錄せ、二〇即ち汝が見しところの我が右の手にある七つの星と七つの金の燈臺との奧義なり。七つの星は七つの教會の使にして、七つの燈臺は七つの教會なり。

第二章

一エペソに在る教會の使に書きおくれ。

「右の手に七つの星を持つ者、七つの金の燈臺の間に歩むもの斯く言ふ、二われ汝の行爲と勞と忍耐とを知る。また汝が惡しき者を忍び得ざることと、自ら使徒と稱へて使徒にあらぬ者どもを試みて、その虛僞なるを見あらはしことを知る。三なんぢは忍耐を保ち、我が名のために忍びて倦まざりき。四然れど我なんぢに責むべき所あり、なんぢは初の愛を離れたり。五然れば、なんぢ何處より

墮ちしかを思へ、悔改めて初の行爲をなせ、然らずして若し悔改めずば、我なんぢに到り汝の燈臺を、その處より取除かん。六 然れど汝に取るべき所あり、汝はニコライ宗の行爲を憎む、我も之を憎むなり。七 耳ある者は御靈の諸教會に言ひ給ふことを聽くべし、勝を得る者には、われ神のパラダイスに在る生命の樹の實を食ふことを許さん」

八 スミルナに在る教會の使に書きおくれ。

「最先にして最後なる者、死人となりて復生きし者、かく言ふ、九 われ汝の艱難と貧窮とを知る——されど汝は富める者なり。我はまた自らユダヤ人と稱へてユダヤ人にあらず、サタンの會に屬く者より汝が譏を受くるを知る。一〇 なんぢ受けんとする苦難を懼るな、視よ惡魔なんぢらを試みんとて、汝らの中の或者を獄に入れんとす。汝ら十日のあひだ患難を受けん、なんぢ死に至るまで忠實なれ、然らば我なんぢに生命の冠冕を與へん。一一 耳ある者は御靈の諸教會に言ひ給ふことを聽くべし。勝る得るものは第二の死に害はることなし」

一二 ペルガモに在る教會の使に書きおくれ。

一三 「兩刃の利き劍を持つもの斯く言ふ、われ汝の住むところを知る、彼處には

サタンの座位あり、汝わが名を保ち、わが忠實なる證人アンテパスが汝等のうち即ちサタンの住む所にて殺されし時もなほ我を信ずる信仰を棄てざりき。一四 然れど我なんぢに責むべき一二の事あり、汝の中にバラムの教を保つ者どもあり、バラムはバラクに教へ、彼をしてイスラエルの子孫の前に躓物を置かしめ、偶像に獻げし物を食はせ、かつ淫行をなさしめたり。一五 斯のごとく汝らの中にもニコライ宗の教を保つ者あり。一六 されば悔改めよ、然らずば我すみやかに汝に到り、わが口の劍にて彼らと戰はん。一七 耳ある者は御靈の諸教會に言ひ給ふことを聽くべし、勝を得る者には我かくれたるマナを與へん、また受くる者の外、たれも知らざる新しき名を錄したる白き石を與へん」

一八 テアテラに在る教會の使に書きおくれ。

「目は焰のごとく、足は輝ける眞鍮の如くなる神の子、かく言ふ、一九 われ汝の行爲および汝の愛と信仰と職と忍耐とを知る、又なんぢの初の行爲よりは後の行爲の多きことを知る。二〇 されど我なんぢに責むべき所あり、汝はかの自ら預言者と稱へて我が僕を教へ惑し、淫行をなさしめ、偶像に獻げし物を食はしむる女イゼベルを容れおけり。二一 我かれに悔改むる機を與ふれど、その淫行を悔改むることを

欲せず。二二 視よ、我かれを牀に投げ入れん、又かれと共に姦淫を行ふ者も、その行爲を悔改めずば、大なる患難に投げ入れん。二三 又かれの子供を打ち殺さん、斯てもろもろの教會は、わが人の腎と心とを究むる者なるを知るべし、我は汝等おのおのの行爲に隨ひて報いん。二四 我この他のテアテラの人にして未だかの教を受けず、所謂サタンの深きところを知らぬ汝らに斯くいふ、我ほかの重を汝らに負はせじ。二五 ただ汝等はその有つところを我が到らん時まで保て。二六 勝を得て終に至るまで我が命ぜしことを守る者には、諸國の民を治むる權威を與へん。二七 彼は鐵の杖をもて之を治め、土の器を碎くが如くならん、我が父より我が受けたる權威のごとし。二八 我また彼に曙の明星を與へん。二九 耳ある者は御靈の諸教會に言ひ給ふことを聽くべし」

第三章

一 サルデスに在る教會の使に書きおくれ。

「神の七つの靈と七つの星とを持つ者かく言ふ、われ汝の行爲を知る、汝は生くる名あれど死にたる者なり。二 なんぢ目を覺し、殆んど死なんとする殘のものを堅うせよ、我なんぢの行爲のわが神の前に全からぬを見とめたり。三 然れば汝の如何に受けしか、如何に聽きしかを思ひいで、之を守りて悔改めよ、もし

目を覺さずば盜人のごとく我きたらん、汝わが何れの時きたるかを知らざるべし。四 然れどサルデスにて衣を汚さぬもの數名あり、彼らは白き衣を著て我とともに步まん、斯くするに相應しき者なればなり。五 勝を得る者は斯のごとく白き衣を著せられん、我その名を生命の書より消し落さず、我が父のまへと御使の前とにてその名を言ひあらはさん。六 耳ある者は御靈の諸教會に言ひ給ふことを聽くべし」

七 ヒラデルヒヤにある教會の使に書きおくれ。

「聖なるもの眞なる者、ダビデの鍵を持ちて、開けば閉づる者なく、閉づれば開く者なき者かく言ふ、八 われ汝の行爲を知る、視よ、我なんぢの前に開けたる門を置く、これを閉ぢ得る者なし。汝すこしの力ありて我が言を守り、我が名を否まざりき。九 視よ、我サタンの會、すなはち自らユダヤ人と稱へてユダヤ人にあらず、ただ虛僞をいふ者の中より或者をして汝の足下に來り拜せしめ、わが汝を愛せしことを知らしめん。一〇 汝わが忍耐の言を守りし故に、我なんぢを守りて地に住む者どもを試むるために全世界に來らんとする試錬のときに免れしめん。一一 われ速かに來らん、汝の有つものを守りて、汝の冠冕を人に奪はれざれ。一二 われ勝を得る者を我が神の聖所の柱とせん、彼は再び外に出でざるべし、又かれの上に、わが神の

名および我が神の都、すなはち天より我が神より降る新しきエルサレムの名と我が
新しき名とを書き記さん。一三 耳ある者は御靈の諸教會に言ひ給ふことを聽くべし」
一四 ラオデキヤに在る教會の使に書きおくれ。
「アァメンたる者、忠實なる眞なる證人、神の造り給ふものの本源たる者か
く言ふ、一五 われ汝の行爲を知る、なんぢは冷かにもあらず熱きにもあらず、我は寧
ろ汝が冷かならんか、熱からんかを願ふ。一六 かく熱きにもあらず、冷かにもあら
ず、ただ微溫が故に、我なんぢを我が口より吐出さん。一七 なんぢ、我は富めり、豐
なり、乏しき所なしと言ひて、己が惱める者・憐むべき者・貧しき者・盲目なる者
・裸なる者たるを知らざれば、一八 我なんぢに勸む、なんぢ我より火にて煉りたる金
を買ひて富め、白き衣を買ひて身に纏ひ、なんぢの裸體の恥を露さざれ、眼藥を買
ひて汝の目に塗り、見ることを得よ、一九 凡てわが愛する者は、我これを戒め、之を
懲す。この故に、なんぢ勵みて悔改めよ。二〇 視よ、われ戸の外に立ちて叩く、人も
し我が聲を聞きて戸を開かば、我その內に入りて彼とともに食し、彼もまた我とと
もに食せん。二一 勝を得る者には我とともに我が座位に坐することを許さん、我の勝
を得しとき、我が父とともに其の御座に坐したるが如し。二二 耳ある者は御靈の諸教

會に言ひ給ふことを聽くべし』

第四章

一 この後、われ見しに、視よ天に開けたる門あり。初に我に語るを聞
きしラッパのごとき聲いふ『ここに登れ、我この後おこるべき事を汝
に示さん』 二 直ちに、われ御靈に感ぜしが、視よ天に御座設けあり。その御座に坐
したまふ者あり、 三 その坐し給ふものの狀は碧玉、赤瑪瑙のごとく、かつ御座の
周圍には綠玉のごとき虹ありき。 四 また御座のまはりに二十四の座位ありて二十四
人の長老、白き衣を纏ひ、首に金の冠冕を戴きて、その座位に坐せり。 五 御座より
數多の電光と聲と雷霆と出づ。また御座の前に燃えたる七つの燈火あり、これ神の
七つの靈なり。 六 御座のまへに水晶に似たる玻璃の海あり。御座の中央と御座の
周圍とに四つの活物ありて前も後も數々の目にて滿ちたり。 七 第一の活物は獅子の
ごとく、第二の活物は牛のごとく、第三の活物は面のかたち人のごとく、第四の活
物は飛ぶ鷲のごとし。 八 この四つの活物おのおの六つの翼あり、翼の內も外も數々
の目にて滿ちたり、日も夜も絕間なく言ふ、
『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、昔在し、今在し、後來りたまふ主
たる全能の神』 九 この活物ら御座に坐し、世世限りなく活きたまふ者に榮光と尊崇

とを歸し、感謝する時、一〇二十四人の長老、御座に坐したまふ者のまへに伏し、世
世限りなく活きたまふ者を拜し、おのれの冠冕を御座のまへに投出して言ふ、
一一『我らの主なる神よ、榮光と尊崇と能力とを受け給ふは宜なり。汝は萬物を
造りたまひ、萬物は御意によりて存し、かつ造られたり』

第五章

一我また御座に坐し給ふ者の右の手に、卷物のあるを見たり。その裏
表に文字あり、七つの印をもて封ぜらる。二また大聲に『卷物を開き
てその封印を解くに相應しき者は誰ぞ』と呼はる强き御使を見たり。三然るに天に
も地にも、地の下にも、卷物を開きて之を見得る者なかりき。四卷物を開き、これ
を見るに相應しき者の見えざりしに因りて、我いたく泣きゐたりしに、五長老の
一人われに言ふ『泣くな、視よユダの族の獅子・ダビデの蒴蘂、すでに勝を得て卷
物とその七つの封印とを開き得るなり。六我また御座および四つの活物と長老たち
との間に、屠られたるが如き羔羊の立てるを見たり、之に七つの角と七つの目とあ
り。この目は全世界に遣されたる神の七つの靈なり。七かれ來りて御座に坐したま
ふ者の右の手より卷物を受けたり。八卷物を受けたるとき四つの活物および二十四
人の長老おのおの立琴と香の滿ちたる金の鉢とをもちて羔羊の前に平伏せり、此の

香は聖徒の祈禱なり。九斯て新しき歌を謳ひて言ふ、
『なんぢは卷物を受け、その封印を解くに相應しきなり、汝は屠られ、その
血をもて諸種の族・國語・民・國の中より人々を神のために買ひ、一〇之を我らの神
のために國民となし、祭司となし給へばなり。彼らは地の上に王となるべし』
一一我また見しに、御座と活物と長老たちとの周圍にをる多くの御使の聲を聞け
り。その數、千々萬々にして、一二大聲にいふ、『屠られ給ひし羔羊こそ能力と富と
智慧と勢威と尊崇と榮光と讃美とを受くるに相應しけれ』一三我また天に、地に、地
の下に、海にある萬の造られたる物、また凡てその中にある物の云へるを聞けり。
曰く、
『願くは御座に坐し給ふものと羔羊とに讃美と尊崇と榮光と權力と世々限り
なくあらん事を』一四四つの活物はアメンと言ひ、長老たちは平伏して拜せり。

第六章

一羔羊その七つの封印の一つを解き給ひし時、われ見しに、四つの活
物の一つが雷霆のごとき聲して『來れ』と言ふを聞けり。二また見し
に、視よ白き馬あり、之に乘るもの弓を持ち、かつ冠冕を與へられ、勝ちて復勝た
んとて出でゆけり。

三 第二の封印を解き給ひたれば、第二の活物の『來れ』と言ふを聞けり。四 斯て赤き馬いで來り、これに乘るもの地より平和を奪ひ取ることと人をして互に殺さしむる事とを許され、また大なる劍を與へられたり。

五 第三の封印を解き給ひたれば、第三の活物の『來れ』と言ふを聞けり。われ見しに、視よ黑き馬あり、之に乘るもの手に權衡を持てり。六 斯て、われ四つの活物の間より出づるごとき聲を聞けり。曰く『小麥五合は一デナリ、大麥一升五合は一デナリなり、油と葡萄酒とを害ふな』

七 第四の封印を解き給ひたれば、第四の活物の『來れ』と言ふを聞けり。八 われ見しに、視よ青ざめたる馬あり、之に乘る者の名を死といひ、陰府これに隨ふ、かれらは地の四分の一を支配し、劍と、饑饉と死と地の獸とをもて人を殺すことを許されたり。

九 第五の封印を解き給ひたれば、曾つて神の言のため、又その立てし證のために殺されし者の靈魂の祭壇の下に在るを見たり。一〇 彼ら大聲に呼はりて言ふ『聖にして眞なる主よ、何時まで審かずして地に住む者に我らの血の復讐をなし給はぬか』一一 爰におのおの白き衣を與へられ、かつ己等のごとく殺されんとする同じ僕たる者と兄弟との數の滿つるまで、なほ暫く安んじて待つべきを言聞けられたり。

一二 第六の封印を解き給ひし時、われ見しに、大なる地震ありて日は荒き毛布のごとく黑く、月は全面、血の如くなり、一三 天の星は無果花の樹の大風に搖られて生の大なる日既に來ればなり。誰か立つことを得ん』

第七章

一 この後、われ四人の御使の地の四隅に立つを見たり、彼らは地の四方の風を引止めて地にも海にも、諸種の樹にも風を吹かせざりき。

二 また他の一人の御使の、いける神の印を持ちて日の出づる方より登るを見たり、かれ地と海とを害ふ權を與へられたる四人の御使にむかひ、大聲に呼はりて言ふ、

三 『われらが我らの神の僕の額に印するまでは地をも海をも樹をも害ふな』四 われ印せられたる者の數を聽きしに、イスラエルの子等のもろもろの族の中にて印せられたるもの合せて十四萬四千あり。五 ユダの族の中にて一萬二千印せられ、ルベン

の族の中にて一萬二千、ガドの族の中にて一萬二千、
六 アセルの族の中にて一萬二千、ナフタリの族の中にて一萬二千、マナセの族の中にて一萬二千、
七 シメオンの族の中にて一萬二千、レビの族の中にて一萬二千、イサカルの族の中にて一萬二千、
八 ゼブルンの族の中にて一萬二千、ヨセフの族の中にて一萬二千、ベニヤミンの族の中にて一萬二千、印せられたり。
九 この後われ見しに、視よ、もろもろの國・族・民・國語の中より誰も數へつくすこと能はぬ大なる群衆しろき衣を纏ひて手に棕櫚の葉をもち御座と羔羊との前に立ち、
一〇 大聲に呼はりて言ふ、『救は御座に坐したまふ我らの神と羔羊とにこそ在れ』
一一 御使みな御座および長老たちと四つの活物との周圍に立ちて御座の前に平伏し神を拜して言ふ、
一二 『アァメン、讃美・榮光・智慧・感謝・尊貴・能力・勢威、世々限りなく我らの神にあれ、アァメン』
一三 長老たちの一人われに向ひて言ふ『この白き衣を著たるは如何なる者にして何處より來りしか』
一四 我いふ『わが主よ、なんぢ知れり』かれ言ふ『かれらは大なる患難より出できたり、羔羊の血に己が衣を洗ひて白くしたる者なり。
一五 この故に神の御座の前にありて晝も夜もその聖所にて神に事ふ。御座に坐したまふ者は彼らの上に幕屋を張り給ふべし。
一六 彼らは重ねて飢ゑず、重ねて渴かず、日も熱も彼らを

侵すことなし。
一七 御座の前にいます羔羊は彼らを牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より凡ての涙を拭ひ給ふべければなり』

第八章

一 第七の封印を解き給ひたれば、凡そ半時のあひだ天靜かなりき。
二 われ神の前に立てる七人の御使を見たり、彼らは七つのラッパを與へられたり。
三 また他の一人の御使、金の香爐を持ちきたりて祭壇の前に立ち、多くの香を與へられたり。これは凡ての聖徒の祈に加へて御座の前なる金の香壇の上に獻げんためなり。
四 而して香の煙、御使の手より聖徒たちの祈とともに神の前に上れり。
五 御使その香爐をとり之に祭壇の火を盛りて地に投げたれば、數多の雷霆と聲と電光と、また地震おこれり。
六 ここに七つのラッパをもてる七人の御使これを吹く備をなせり。
七 第一の御使ラッパを吹きしに血の混りたる雹と火とありて、地にふりくだり、地の三分の一、燒け失せ、樹の三分の一、燒け失せ、もろもろの青草、燒け失せたり。
八 第二の御使ラッパを吹きしに火にて燃ゆる大なる山の如きもの海に投げ入れ

られ、海の三分の一、血に變じ、死に、船の三分の一、滅びたり。
一〇 第三の御使ラッパを吹きしに燈火のごとく燃ゆる大なる星、天より隕ちきたり、川の三分の一と水の源泉との上におちたり。 一一 この星の名は苦艾といふ。水の三分の一は苦艾となり、水の苦くなりしに因りて多くの人、死にたり。
一二 第四の御使ラッパを吹きしに、日の三分の一と月の三分の一と星の三分の一と擊たれて、その三分の一は暗くなり、晝も三分の一は光なく、夜も亦おなじ。
一三 また見しに、一つの鷲の中空を飛び、大なる聲して言ふを聞けり。曰く『地に住める者どもは禍害なるかな、禍害なるかな、禍害なるかな、尙ほかに三人の御使の吹かんとするラッパの聲あるに因りてなり』

第九章

一 第五の御使ラッパを吹きしに、われ一つの星の天より地に隕ちたるを見たり。この星は底なき坑の鍵を與へられたり。 二 斯て底なき坑を開きたれば、大なる爐の煙のごとき煙、坑より立ちのぼり日も空も坑の煙にて暗くなれり。 三 煙の中より蝗、地上に出でて地の蝎のもてる力のごとき力を與へられ、
四 地の草、すべての青きもの又すべての樹を害ふことなく、ただ額に神の印なき人

をのみ害ふことを命ぜられたり。 五 然れど彼らを殺すことを許されず、五月のあひだ苦しむることを許さる、その苦痛は蝎に刺されたる苦痛のごとし。 六 このとき人人、死を求むとも見出さず、死なんと欲すとも死は逃げ去るべし。 七 かの蝗の形は戰爭の爲に具へたる馬のごとく、頭には金に似たる冠冕の如きものあり、顏は人の顏のごとく、 八 之に女の頭髮のごとき頭髮あり、齒は獅子の齒のごとし。 九 また鐵の胸當のごとき胸當あり、その翼の音は軍車の轟くごとく、多くの馬の戰鬪に馳せゆくが如し。 一〇 また蝎のごとき尾ありて之に刺あり、この尾に五月のあひだ人を害ふ力あり。 一一 この蝗に王あり。底なき所の使にして名をヘブル語にてアバドンと云ひ、ギリシヤ語にてアポルオンと云ふ。
一二 第一の禍害すぎ去れり、視よ此の後なほ二つの禍害きたらん。
一三 第六の御使ラッパを吹きしに、神の前なる金の香壇の四つの角より聲ありて、 一四 ラッパを持てる第六の御使に『大なるユウフラテ川の邊に繫がれをる四人の御使を解き放て』と言ふを聞けり。 一五 斯てその時、その日、その月、その年に至りて人の三分の一を殺さん爲に備へられたる四人の御使は、解き放たれたり。 一六 騎兵の數は二億なり、我その數を聞けり。 一七 われ幻影にてその馬と之に乘る者とを見し

に彼らは火・煙・硫黄の色したる胸當を著く。馬の頭は獅子の頭のごとくにて、その口よりは火と煙と硫黄と出づ。一八 この三つの苦痛、すなはち其の口より出づる火と煙と硫黄とに因りて人の三分の一、殺されたり。一九 馬の力はその口とその尾とにあり、その尾は蛇の如くにして頭あり、之をもて人を害ふなり。二〇 これらの苦痛にて殺されざりし殘の人々は、おのが手の業を悔改めずして、なほ惡鬼を拜し、見ること、聞くこと歩むこと能はぬ金・銀・銅・石・木の偶像を拜せり。二一 又その殺人・咒術・淫行・竊盜を悔改めざりき。

第一〇章

一 我また一人の強き御使の雲を著て天より降るを見たり。その頭の上に虹あり、その顔は日の如く、その足は火の柱のごとし。二 その手には展きたる小き卷物をもち、右の足を海の上におき、左の足を地の上におき、三 獅子の吼ゆる如く大聲に呼はれり、呼はりたるとき七つの雷霆おのおの聲を出せり。四 七つの雷霆の語りし時、われ書き記さんとせしに天より聲ありて『七つの雷霆の語りしことは封じて書き記すな』といふを聞けり。五 斯て我が見しところの海と地とに跨り立てる御使は天にむかひて右の手を擧げ、六 天および其の中に在るもの、地および其の中にあるもの、海および其の中にある物を造り給ひし世々限りなく生

きたまふ者を指し、誓ひて言ふ『この後、時は延ぶることなし。七 第七の御使の吹かんとするラッパの聲の出づる時に至りて神の僕なる預言者たちに示し給ひし如く、その奥義は成就せらるべし』八 斯て我が前に天より聞きし聲のまた我に語りて『なんぢ往きて海と地とに跨り立てる御使の手にある展きたる卷物を取れ』と言ふを聞けり。九 われ御使のもとに往きて小き卷物を我に與へんことを請ひたれば、彼いふ『これを取りて食ひ盡せ、さらば汝の腹苦くならん、然れど其の口には蜜のごとく甘からん』一〇 われ御使の手より小き卷物をとりて食ひ盡したれば、口には蜜のごとく甘かりしが、食ひし後わが腹は苦くなれり。一一 また或者われに言ふ『なんぢ再び多くの民・國・國語・王たちに就きて預言すべし』

第一一章

一 爰に、われ杖のごとき間竿を與へられたり、斯て或者いふ『立ちて神の聖所と香壇と其處に拜する者どもとを度れ、二 聖所の外の庭は差措きて度るな、これは異邦人に委ねられたり、彼らは四十二个月のあひだ聖なる都を蹂躙らん。三 我わが二人の證人に權を與へん、彼らは荒布を著て千二百六十日のあひだ預言すべし。四 彼らは地の主の御前に立てる二つのオリブの樹、二つの燈臺なり。五 もし彼らを害はんとする者あらば、火その口より出でてその敵を焚き盡さ

ん。もし彼らを害はんとする者あらば、必ず斯のごとく殺さるべし。六彼らは預言するあひだ雨を降らせぬやうに天を閉づる權力あり、また水を血に變らせ、思ふまに幾度にても諸種の苦難をもて地を擊つ權力あり。七彼等がその證を終へんとき底なき所より上る獸ありて之と戰鬪をなし、勝ちて之を殺さん。八その屍體は大なる都の衢に遺らん。この都を譬へてソドムと云ひ、エジプトと云ふ、卽ち彼らの主もまた十字架に釘けられ給ひし所なり。九もろもろの民・族・國語・國のもの、三日半の間その屍體を見、かつ其の屍體を墓に葬ることを許さざるべし。一〇地に住む者どもは彼らに就きて喜び樂しみ互に禮物を贈らん、此の二人の預言者は地に住む者を苦しめたればなり』一一三日半ののち生命の息、神より出でて彼らに入り、かれら足にて起ちたれば、之を見るもの大に懼れたり。一二天より大なる聲して『ここに昇れ』と言ふを彼ら聞きたれば、雲に乘りて天に昇れり、その敵も之を見たり。一三このとき大なる地震ありて都の十分の一は倒れ、地震のために死にしもの七千人にして遺れる者は懼をいだき天の神に榮光を歸したり。

一四第二の禍害すぎ去れり、視よ第三の禍害すみやかに來るなり。

一五第七の御使ラッパを吹きしに、天に數多の大なる聲ありて、『この世の國は

我らの主および其のキリストの國となれり。彼は世々限りなく王たらん』と言ふ。

一六かくて神の前にて座位に坐する二十四人の長老ひれふし神を拜して言ふ、一七『今いまし昔いまする主たる全能の神よ、なんぢの大なる能力を執りて王と成り給ひしことを感謝す。一八諸國の民、怒を懷けり、なんぢの怒も亦いたれり、死にたる者を審き、なんぢの僕なる預言者および聖徒、また小なるも大なるも汝の名を畏るる者に報賞をあたへ、地を亡す者を亡したまふ時いたれり』一九斯て天にある神の聖所ひらけ、聖所のうちに契約の櫃見え、數多の電光と聲と雷霆と、また地震と大なる雹とありき。

第一二章

一また天に大なる徵、見えたり。日を著たる女ありて其の足の下に月あり、其の頭に十二の星の冠冕あり。二かれは孕りをりしが、子を產まんとして產の苦痛と惱とのために叫べり。三また天に他の徵、見えたり。視よ大なる赤き龍あり、これに七つの頭と十の角とありて頭には七つの冠冕あり。四その尾は天の星の三分の一を引きて之を地に落せり。龍は子を產まんとする女の前に立ち、產むを待ちて其の子を食ひ盡さんと構へたり。五女は男子を產めり、この子は鐵の杖もて諸種の國人を治めん。かれは神の許に、その御座の下に擧げられたり。

六 女は荒野に逃げゆけり、彼處に千二百六十日の間かれが養はるる爲に神の備へ給
へる所あり。
七 斯て天に戰爭おこれり、ミカエル及びその使たち龍とたたかふ。龍もその使
たちも之と戰ひしが、八 勝つこと能はず、天には、はや其の居る所なかりき。九 か
の大なる龍、すなはち惡魔と呼ばれ、サタンと呼ばれたる全世界をまどはす古き蛇
は落され、地に落され、その使たちも共に落されたり。一〇 我また天に大なる聲あり
て、『われらの神の救と能力と國と神のキリストの權威とは、今すでに來れり。我
らの兄弟を訴へ夜晝われらの神の前に訴ふるもの落されたり。一一 而して兄弟たちは
羔羊の血と己が證の言とによりて勝ち、死に至るまで己が生命を惜まざりき。一二 こ
の故に天および天に住める者よ、よろこべ、地と海とは禍害なるかな、惡魔おのが
時の暫時なるを知り、大なる憤恚を懷きて汝等のもとに下りたればなり』と云ふを
聞けり。
一三 斯て龍はおのが地に落されしを見て男子を生みし女を責めたりしが、一四 女は
荒野なる己が處に飛ぶために大なる鷲の兩の翼を與へられたれば、其處にいたり一
年、二年、また半年のあひだ蛇のまへを離れて養はれたり。一五 蛇はその口より水を

川のごとく、女の背後に吐きて之を流さんとしたれど、一六 地は女を助け、その口を
開きて龍の口より吐きたる川を呑み盡せり。一七 龍は女を怒りてその裔の殘れるも
の、卽ち神の誡命を守り、イエスの證を有てる者に戰鬪を挑まんとて出でゆき、
一八 海邊の砂の上に立てり。

第一三章

一 我また一つの獸の海より上るを見たり。之に十の角と七つの頭とあ
り、その角に十の冠冕あり、頭の上には神を瀆す名あり。二 わが見し
獸は豹に似て、その足は熊のごとく、その口は獅子の口のごとし。龍は、これに己
が能力と己が座位と大なる權威とを與へたり。三 我その頭の一つ傷つけられて死ぬ
るばかりなるを見しが、その死ぬべき傷いやされたれば、全地の者これを怪しみて
獸に從へり。四 また龍おのが權威を獸に與へしによりて彼ら龍を拜し、且その獸を
拜して言ふ『たれか此の獸に等しき者あらん、誰か之と戰ふことを得ん』五 獸また
大言と瀆言とを語る口を與へられ、四十二个月のあひだ働く權威を與へらる、六 彼
は口をひらきて神を瀆し、又その御名とその幕屋すなはち天に住む者どもとを瀆
し、七 また聖徒に戰鬪を挑みて、之に勝つことを許され、且もろもろの族・民・國
語・國を掌どる權威を與へらる。八 凡て地に住む者にて其の名を、屠られ給ひし

羔羊の生命の書に、世の創より記されざる者は、これを拜せん。九人もし耳あらば聽くべし。一〇虜にせらるべき者は虜にせられん、劍にて殺す者は、おのれも劍にて殺さるべし、聖徒たちの忍耐と信仰とは茲にあり。

一一我また他の獸の地より上るを見たり。これに羔羊のごとき角二つありて龍のごとくに語り、一二先の獸の凡ての權威を彼の前にて行ひ、地と地に住む者とをして死ぬべき傷の醫されたる先の獸を拜せしむ。一三また大なる徵をおこなひ、人々の前にて火を天より地に降らせ、一四かの獸の前にて行ふことを許されし徵をもて地に住む者どもを惑し、劍にうたれてなほ生ける獸の像を造ることを地に住む者どもに命じたり。一五而してその獸の像に息を與へて物言はしめ、且その獸の像を拜せぬ者をことごとく殺さしむる事を許され、一六また凡ての人をして、大小・貧富・自主・奴隸の別なく、或はその右の手、あるひは其の額に徵章を受けしむ、一七この徵章を有たぬ凡ての者に賣買することを得ざらしめたり。その徵章は獸の名、もしくは其の名の數字なり。一八智慧は茲にあり、心ある者は獸の數字を算へよ。獸の數字は人の數字にして、その數字は六百六十六なり。

第一四章

一われ見しに、視よ羔羊シオンの山に立ちたまふ。十四萬四千の人、

これと偕に居り、その額には羔羊の名および羔羊の父の名、記しあり。二われ天よりの聲を聞けり、多くの水の音のごとく、大なる雷霆の聲のごとし。わが聞きし此の聲は彈琴者の立琴を彈く音のごとし。三かれら新しき歌を御座の前および四つの活物と長老等との前にて歌ふ。この歌は地より贖はれたる十四萬四千人の他は誰も學びうる者なかりき。四彼らは女に汚されぬ者なり、潔き者なり、何處にまれ羔羊の往き給ふところに隨ふ。彼らは人の中より贖はれて神と羔羊とのために初穗となれり。五その口に虛僞なし、彼らは瑕なき者なり。

六我また他の御使の中空を飛ぶを見たり。かれは地に住むもの、卽ちもろもろの國・族・國語・民に宣傳へんとて永遠の福音を携へ、七大聲にて言ふ『なんぢら神を畏れ、神に榮光を歸せよ。その審判のとき既に至りたればなり。汝ら天と地と海と水の源泉とを造り給ひし者を拜せよ』

八ほかの第二の御使、かれに從ひて言ふ『倒れたり、倒れたり。大なるバビロン、己が淫行より出づる憤恚の葡萄酒をもろもろの國人に飲ませし者』

九ほかの第三の御使、かれらに從ひ大聲にて言ふ『もし獸とその像とを拜し、且その額あるひは手に徽章を受くる者あらば、一〇必ず神の怒の酒杯に盛りたる混り

なき憤恚の葡萄酒を飲み、かつ聖なる御使たち及び羔羊の前にて火と硫黄とにて苦しめらる可し。一一 その苦痛の煙は世々限りなく立ち昇りて獸とその像とを拜する者、また其の名の徽章を受けし者は夜も晝も休息を得ざらん。一二 神の誡命とイエスを信ずる信仰とを守る聖徒の忍耐は茲にあり』

一三 我また天より聲ありて『書き記せ「今よりのち主にありて死ぬる死人は幸福なり」御靈も言ひたまふ「然り彼等は、その勞役を止めて息まん。その業これに隨ふなり」』と言ふを聞けり。

一四 また見しに、視よ白き雲あり、その雲の上に人の子の如きもの坐して首には金の冠冕をいただき、手には利き鎌を持ちたまふ。一五 又ほかの御使、聖所より出で雲のうへに坐したまふ者にむかひ、大聲に呼はりて『なんぢの鎌を入れて刈れ、地の穀物は全く熟し、既に刈り取るべき時至ればなり』と言ふ。一六 かくて雲の上に坐したまふ者、その鎌を地に入れたれば、地の穀物は刈り取られたり。

一七 又ほかの御使、天の聖所より出で同じく利き鎌を持てり。一八 又ほかの火を掌どる御使、祭壇より出で、利き鎌をもつ者にむかひ大聲に呼はりて『なんぢの利き鎌を入れて地の葡萄の樹の房を刈り收めよ、葡萄は既に熟したり』と言ふ。一九 御使

その鎌を地に入れて地の葡萄を刈りをさめ神の憤恚の大なる酒槽に投入れたり。二〇 かくて都の外にて酒槽を踐みしに、血酒槽より流れ出でて馬の轡に達くほどになり一千六百町に廣がれり。

第一五章

一 我また天に他の大なる怪しむべき徵を見たり。即ち七人の御使ありて最後の七つの苦難を持てり、神の憤恚は之にて全うせらるるなり。

二 我また火の混りたる玻璃の海を見しに、獸とその像とその名の數字とに勝ちたる者ども神の立琴を持ちて玻璃の海の邊に立てり。三 彼ら神の僕モーセの歌と羔羊の歌とを歌ひて言ふ、

『主なる全能の神よ、なんぢの御業は大なるかな、妙なるかな、萬國の王よ、なんぢの道は義なるかな、眞なるかな。四 主よ、たれか汝を畏れざる、誰か御名を尊ばざる、汝のみ聖なり、諸種の國人きたりて御前に拜せん。なんぢの審判は既に現れたればなり』

五 この後われ見しに、天にある證の幕屋の聖所ひらけて、六 かの七つの苦難を持てる七人の御使、きよき輝ける亞麻布を著、金の帶を胸に束ねて聖所より出づ。七 四つの活物の一つ、その七人の御使に世々限りなく生きたまふ神の憤恚の滿ちた

る七つの金の鉢を與へしかば、八聖所は神の榮光とその權力とより出づる煙にて滿ち、七人の御使の七つの苦難の終るまでは誰も聖所に入ること能はざりき。

第一六章

一我また聖所より大なる聲ありて七人の御使に『往きて神の憤恚の鉢を地の上に傾けよ』と言ふを聞けり。

二斯て第一の者ゆきて其の鉢を地の上に傾けたれば、獸の徽章を有てる人々とその像を拜する人々との身に惡しき苦しき腫物生じたり。

三第二の者、その鉢を海の上に傾けたれば、海は死人の血の如くなりて海にある生物ことごとく死にたり。

四第三の者その鉢をもろもろの河と、もろもろの水の源泉との上に傾けたれば、みな血となれり。五われ水を掌どる御使の『いま在し昔いますの聖なる者よ、なんぢの斯く定め給ひしは、正しき事なり。六彼らは聖徒と預言者との血を流したれば、之に血を飲ませ給ひしは相應しきなり』と云へるを聞けり。七我また祭壇の物言ふを聞けり『然り主なる全能の神よ、なんぢの審判は眞なるかな、義なるかな』と。

八第四の者その鉢を太陽の上に傾けたれば、太陽は火をもて人を燒くことを許

さる。九斯て人々、烈しき熱に燒かれて此等の苦難を掌どる權威を有ちたまふ神の名を瀆し、かつ悔改めずして神に榮光を歸せざりき。

一〇第五の者その鉢を獸の座位の上に傾けたれば、獸の國、暗くなり、その國人、痛によりて己の舌を齧み、一一その痛と腫物とによりて天の神を瀆し、かつ己が行爲を悔改めざりき。

一二第六の者その鉢を大なる河ユウフラテの上に傾けたれば、河の水涸れたり。これ日の出づる方より來る王たちの途を備へん爲なり。一三我また龍の口より、獸の口より、僞預言者の口より蛙のごとき三つの穢れし靈の出づるを見たり。一四これは徽をおこなふ惡鬼の靈にして、全能の神の大なる日の戰鬪のために全世界の王等を集めんとて、その許に出でゆくなり。一五（視よ、われ盜人のごとく來らん、裸にて歩み羞所を見らるること莫からん爲に、目を覺してその衣を守る者は幸福なり）一六かの三つの靈、王たちをヘブル語にてハルマゲドンと稱ふる處に集めたり。

一七第七の者その鉢を空中に傾けたれば、聖所より、御座より大なる聲いでて『事すでに成れり』と言ふ。一八斯て數多の電光と聲と雷霆とあり、また大なる地震おこれり、人の地の上に在りし以來かかる大なる地震なかりき。一九大なる都は三つ

に裂かれ、諸國の町々は倒れ、大なるバビロンは、神の前におもひ出されて劇しき御怒の葡萄酒を盛りたる酒杯を與へられたり。二〇 凡ての島は逃げさり、山は見えずなれり。二一 また天より百斤ほどの大なる雹、人々の上に降りしかば、人々雹の苦難によりて神を瀆せり。是その苦難、甚だしく大なればなり。

第一七章

一 七つの鉢を持てる七人の御使の一人きたり我に語りて言ふ『來れ、われ多くの水の上に坐する大淫婦の審判を汝に示さん。二 地の王等は之と淫をおこなひ、地に住む者らは其の淫行の葡萄酒に醉ひたり』三 斯て、われ御靈に感じ、御使に携へられて荒野にゆき、緋色の獸に乘れる女を見たり、この獸の體は神を瀆す名にて覆はれ、また七つの頭と十の角とあり。四 女は紫色と緋とを著、金・寶石・眞珠にて身を飾り手には憎むべきものと己が淫行の汚とにて滿ちたる金の酒杯を持ち、五 額には記されたる名あり。曰く『奥義、大なるバビロン、地の淫婦らと憎むべき者との母』六 我この女を見るに、聖徒の血とイエスの證人の血とに醉ひたり。我これを見て大に怪しみたれば、七 御使われに言ふ『なにゆゑ怪しむか、我この女と之を乘せたる七つの頭、十の角ある獸との奥義を汝に告げん。八 なんぢの見し獸は前に有りしも今あらず、後に底なき所より上りて滅亡に往か

ん、地に住む者にて世の創より其の名を生命の書に記されざる者は、獸の前にありて今あらず、後に來るを見て怪しまん。九 智慧の心は茲にあり、七つの頭は女の坐する七つの山なり、また七人の王なり。一〇 五人は既に倒れて一人は今あり、他の一人は未だ來らず、來らば暫時のほど止まるべきなり。一一 前にありて今あらぬ獸は第八なり、前の七人より出でたる者にして滅亡に往くなり。一二 汝の見し十の角は十人の王にして未だ國を受けざれども、一時のあひだ獸と共に王のごとき權威を受くべし。一三 彼らは心を一つにして己が能力と權威とを獸にあたふ。一四 彼らは羔羊と戰はん。而して羔羊かれらに勝ち給ふべし、彼は主の主、王の王なればなり。これと偕なる召されたるもの、選ばれたるもの、忠實なる者も勝を得べし』一五 御使また我に言ふ『なんぢの見し水、すなはち淫婦の坐する處は、もろもろの民・群衆・國・國語なり。一六 なんぢの見し十の角と獸とは、かの淫婦を憎み、之をして荒凉ばしめ、裸ならしめ、且その肉を喰ひ、火をもて之を燒き盡さん。一七 神は彼らに御旨を行ふことと、心を一つにすることと、神の御言の成就するまで國を獸に與ふることとを思はしめ給ひたればなり。一八 なんぢの見し女は地の王たちを宰どる大なる都なり』

第一八章

一　この後また他の一人の御使の大なる權威を有ちて天より降るを見しに、地はその榮光によりて照されたり。二　かれ强き聲にて呼はりて言ふ『大なるバビロンは倒れたり、倒れたり、かつ惡魔の住家、もろもろの穢れたる靈の檻、もろもろの穢れたる憎むべき鳥の檻となれり。三　もろもろの國人は、その淫行の憤恚の葡萄酒を飲み、地の王たちは彼と淫をおこなひ、地の商人らは彼の奢の勢力によりて富みたればなり』

四　また天より他の聲あるを聞けり。曰く『わが民よ、かれの罪に干らず、彼の苦難を共に受けざらんため、その中を出でよ。五　かれの罪は積りて天にいたり、神その不義を憶え給ひたればなり。六　彼が爲しし如く彼に爲し、その行爲に應じ、倍して之に報い、かれが酌み與へし酒杯に倍して之に酌與へよ。七　かれが自ら尊び、みづから奢りしと同じほどの苦難と悲歎とを之に與へよ。彼は心のうちに「われは女王の位に坐する者にして寡婦にあらず、決して悲歎を見ざるべし」と言ふ。八　この故に、さまざまの苦難、一日のうちに彼の身にきたらん、卽ち死と悲歎と饑饉となり。彼また火にて燒き盡されん、彼を審きたまふ主たる神は强ければなり。九　彼と淫をおこなひ、彼とともに奢りたる地の王たちは其の燒かるる烟を見て泣き、か

つ歎き、一〇　その苦難を懼れ、遙に立ちて「禍害なるかな、禍害なるかな、大なる都、堅固なる都バビロンよ、汝の審判は時の間に來れり」と言はん。一一　地の商人かれが爲に泣き悲しまん、今より後その商品を買ふ者なければなり。一二　その商品は金・銀・寶石・眞珠・細布・紫色・絹・緋色および各樣の香木、また象牙のさまざまの器、價貴き木、眞鍮、鐵、蠟石などの各樣の器、一三　また肉桂・香料・香・香油・乳香・葡萄酒・オリブ油・麥粉・麥・牛・羊・馬・車・奴隸および人の靈魂なり。一四　なんぢの靈魂の嗜みたる果物は汝を去り、すべての美味、華美なる物は亡びて汝を離れん、今より後これを見ること無かるべし。一五　これらの物を商ひ、バビロンに由りて富を得たる商人らは其の苦難を懼れて遙に立ち、泣き悲しみて言はん、一六「禍害なるかな、禍害なるかな、細布と紫色と緋とを著、金・寶石・眞珠をもて身を飾りたる大なる都、一七　斯ばかり大なる富の時の間に荒凉ばんとは」而して凡ての船長、すべて海をわたる人々、舟子および海によりて生活を爲すもの遙に立ち、一八　バビロンの燒かるゝ煙を見て叫び「いづれの都か、この大なる都に比ぶべき」と言はん。一九　彼等また塵をおのが首に被りて泣き悲しみ叫びて「禍害なるかな、禍害なるかな、此の大なる都、その奢によりて海に船を有てる人々の富を得たる都、か

く時の間に荒凉ばんとは」と言はん。二〇天よ、聖徒・使徒・預言者よ、この都につきて喜べ、神なんぢらの爲に之を審き給ひたればなり』

二一爰に一人の强き御使、大なる碾臼のごとき石を擡げ海に投げて言ふ『おほいなる都バビロンは斯のごとく烈しく擊ち倒されて、今より後、見えざるべし。二二今よりのち立琴を彈くもの、樂を奏するもの、笛を吹く者、ラッパを鳴す者の聲なんぢの中に聞えず、今より後さまざまの細工をなす細工人なんぢの中に見えず、碾臼の音なんぢの中に聞えず、二三今よりのち燈火の光なんぢの中に輝かず、今よりのち新郎・新婦の聲なんぢの中に聞えざるべし。そは汝の商人は地の大臣となり、諸種の國人は、なんぢの咒術に惑され、二四また預言者・聖徒および凡て地の上に殺されし者の血は、この都の中に見出されたればなり』

第一九章

一　この後われ天に大なる群衆の大聲のごとき者ありて、斯く言ふを聞けり。曰く、

『ハレルヤ、救と榮光と權力とは、我らの神のものなり。二その御審は眞にして義なるなり、己が淫行をもて血を汚したる大淫婦を審き、神の僕らの血の復讐を彼になし給ひしなり』

三また再び言ふ『ハレルヤ、彼の燒かるゝ煙は世々限りなく立ち昇るなり』

四爰に二十四人の長老と四つの活物と平伏して御座に坐したまふ神を拜し『アァメン、ハレルヤ』と言へり。五また御座より聲出でて言ふ、

『すべて神の僕たるもの、神を畏るゝ者よ、小なるも大なるも、我らの神を讃め奉れ』六われ大なる群衆の聲おほくの水の音のごとく、烈しき雷霆の聲の如きものを聞けり。曰く、

『ハレルヤ、全能の主、われらの神は統治すなり、七われら喜び樂しみて之に榮光を歸し奉らん。そは羔羊の婚姻の期いたり、既にその新婦みづから準備したればなり。八彼は輝ける潔き細布を著ることを許されたり、此の細布は聖徒たちの正しき行爲なり』

九御使また我に言ふ『なんぢ書き記せ、羔羊の婚姻の宴席に招かれたる者は幸福なり』と。また我に言ふ『これ神の眞の言なり』一〇我その足下に平伏して拜せんとしたれば、彼われに言ふ『愼みて然すな、我は汝およびイエスの證を保つ汝の兄弟とともに僕たるなり。なんぢ神を拜せよ、イエスの證は卽ち預言の靈なり』

一一我また天の開けたるを見しに、視よ白き馬あり、之に乘りたまふ者は「忠實

また眞」と稱へられ、義をもて審き、かつ戰ひたまふ。一二彼の目は焰のごとく、その頭には多くの冠冕あり、また記せる名あり、之を知る者は彼の他になし。一三彼は血に染みたる衣を纏へり、その名は「神の言」と稱ふ。一四天に在る軍勢は白く潔き細布を著、馬に乘りて彼にしたがふ。一五彼の口より利き劍いづ、之をもて諸國の民をうち、鐵の杖をもて之を治め給はん。また自ら全能の神の烈しき怒の酒槽を踐みたまふ。一六その衣と股とに『王の王、主の主』と記せる名あり。

一七我また一人の御使の太陽のなかに立てるを見たり。大聲に呼はりて、中空を飛ぶ凡ての鳥に言ふ『いざ神の大なる宴席に集ひきたりて、一八王たちの肉、將校の肉、強き者の肉、馬と之に乘る者との肉、すべての自主および奴隸、小なるもの大なる者の肉を食へ』

一九我また獸と地の王たちと彼らの軍勢とが相集りて、馬に乘りたまふ者および其の軍勢に對ひて戰鬪を挑むを見たり。二〇かくて獸は捕へられ、又その前に不思議を行ひて獸の徽章を受けたる者と、その像を拜する者とを惑したる僞預言者も、之とともに捕へられ、二つながら生きたるまま硫黃の燃ゆる火の池に投げ入れられたり。二一その他の者は馬に乘りたまふ者の口より出づる劍にて殺され、凡ての鳥その

肉を食ひて飽きたり。

第二〇章

一我また一人の御使の底なき所の鍵と大なる鎖とを手に持ちて、天より降るを見たり。二彼は龍、すなはち惡魔たりサタンたる古き蛇を捕へて之を千年のあひだ繫ぎおき、三底なき所に投げ入れ閉ぢ込めて、その上に封印し、千年の終るまでは諸國の民を惑すこと勿らしむ。その後、暫時のあひだ解き放さるべし。

四我また多くの座位を見しに、之に坐する者あり、審判する權威を與へられたり。我またイエスの證および神の御言のために馘られし者の靈魂また獸をも、その像をも拜せず、己が額あるひは手にその徽章を受けざりし者どもを見たり。彼らは生きかへりて千年の間キリストと共に王となれり。五（その他の死人は千年の終るまで生きかへらざりき）これは第一の復活なり。六幸福なるかな、聖なるかな、第一の復活に干る人。この人々に對して第二の死は權威を有たず、彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年のあひだ王たるべし。

七千年終りて後サタンは其の檻より解き放たれ、八出でて地の四方の國の民、ゴグとマゴグとを惑し戰鬪のために之を集めん、その數は海の砂のごとし。九斯て

彼らは地の全面に上りて聖徒たちの陣營と愛せられたる都とを圍みしが、天より火くだりて彼等を燒き盡し、一〇彼らを惑したる惡魔は、火と硫黃との池に投げ入れられたり。ここは獸も僞預言者もまた居る所にして、彼らは世々限りなく晝も夜も苦しめらるべし。

一一我また大なる白き御座および之に坐し給ふものを見たり。天も地も、その御顏の前を遁れて跡だに見えずなりき。一二我また死にたる者の大なるも小なるも御座の前に立てるを見たり。而して數々の書展かれ、他にまた一つの書ありて展かる、卽ち生命の書なり、死人は此等の書に記されたる所の、その行爲に隨ひて審かれたり。一三海はその中にある死人を出し、死も陰府もその中にある死人を出したれば、各自その行爲に隨ひて審かれたり。一四斯て死も陰府も火の池に投げ入れられたり、此の火の池は第二の死なり。一五すべて生命の書に記されぬ者は、みな火の池に投げ入れられたり。

第二一章

一我また新しき天と新しき地とを見たり。これ前の天と前の地とは過ぎ去り、海も亦なきなり。二我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾りたる新婦のごとく準備して、神の許をいで、天より降るを見たり。

三また大なる聲の御座より出づるを聞けり。曰く『視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みづから人と偕に在して、四かれらの目の涙をことごとく拭ひ去り給はん。今よりのち死もなく、悲歎も、號叫も、苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり』五斯て御座に坐し給ふもの言ひたまふ『視よ、われ一切のものを新にするなり』また言ひたまふ『書き記せ、これらの言は信ずべきなり、眞なり』六また我に言ひたまふ『事すでに成れり、我はアルパなり、オメガなり、始なり、終なり、渴く者には價なくして生命の水の泉より飲むことを許さん。七勝を得る者は此等のものを嗣がん、我はその神となり、彼は我が子とならん。八されど臆するもの、信ぜぬもの、憎むべきもの、人を殺すもの、淫行のもの、呪術をなすもの、偶像を拜する者および凡て僞る者は、火と硫黃との燃ゆる池にて其の報を受くべし、これ第二の死なり』

九最後の七つの苦難の滿ちたる七つの鉢を持てる七人の御使の一人きたり、我に語りて言ふ『來れ、われ羔羊の妻なる新婦を汝に見せん』一〇御使、御靈に感じたる我を携へて大なる高き山にゆき、聖なる都エルサレムの、神の榮光をもて神の許を出でて天より降るを見せたり。一一その都の光輝はいと貴き玉のごとく、透徹る碧

玉のごとし。一二 此處に大なる高き石垣ありて十二の門あり、門の側らに一人づつ十二の御使あり、門の上に一つづつイスラエルの子孫の十二の族の名を記せり。一三 東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門あり。一四 都の石垣には十二の基あり、これに羔羊の十二の使徒の十二の名を記せり。一五 我と語る者は都と門と石垣とを測らん爲に金の間竿を持てり、一六 都は方形にして、その長さ廣さ相均し。彼は間竿にて都を測りしに一千二百町あり、長さ廣さ高さみな相均し。一七 また石垣を測りしに人の度、すなはち御使の度に據れば百四十四尺あり。一八 石垣は碧玉にて築き、都は清らかなる玻璃のごとき純金にて造れり。一九 都の石垣の基は、さまざまの寶石にて飾れり。第一の基は碧玉、第二は瑠璃、第三は玉髓、第四は綠玉、二〇 第五は紅縞瑪瑙、第六は赤瑪瑙、第七は貴橄欖石、第八は綠柱石、第九は黃玉石、第十は綠玉髓、第十一は青玉、第十二は紫水晶なり。二一 十二の門は十二の眞珠なり、おのおのの門は一つの眞珠より成り、都の大路は透徹る玻璃のごとき純金なり。二二 われ都の內にて宮を見ざりき、主なる全能の神および羔羊はその宮なり。二三 都は日月の照すを要せず、神の榮光これを照し、羔羊はその燈火なり。二四 諸國の民は都の光のなかを歩み、地の王たちは己が光榮を此處に携へきたる。二五 都の

門は終日閉ぢず（此處に夜あることなし）二六 人々は諸國の民の光榮と尊貴とを此處にたづさへ來らん。二七 凡て穢れたる者、また憎むべき事と虛僞とを行ふ者は、此處に入らず、羔羊の生命の書に記されたる者のみ此處に入るなり。

第二二章

一 御使また水晶のごとく透徹れる生命の水の河を我に見せたり。この河は神と羔羊との御座より出でて都の大路の眞中を流る。二 河の左右に生命の樹ありて十二種の實を結び、その實は月毎に生じ、その樹の葉は諸國の民を醫すなり。三 今よりのち詛はるべき者は一つもなかるべし。神と羔羊との御座は都の中にあり。その僕らは之に事へ、四 且その御顏を見ん、その御名は彼らの額にあるべし。五 今よりのち夜ある事なし、燈火の光をも日の光をも要せず、主なる神かれらを照し給へばなり。彼らは世々限りなく王たるべし。

六 彼また我に言ふ『これらの言は信ずべきなり、眞なり、預言者たちの靈魂の神たる主は、速かに起るべき事をその僕どもに示さんとて御使を遣し給へるなり。七 視よ、われ速かに到らん、この書の預言の言を守る者は幸福なり』

八 これらの事を聞き、かつ見し者は我ヨハネなり。斯て見聞せしとき我これらの事を示したる御使の足下に平伏して拜せんと爲しに、九 かれ言ふ『つつしみて然

か爲な、われは汝および汝の兄弟たる預言者、また此の書の言を守る者と等しく僕たるなり、なんぢ神を拜せよ』

一〇 また我に言ふ『この書の預言の言を封ずな、時近ければなり。一一 不義をなす者はいよいよ不義をなし、不淨なる者はいよいよ不淨をなし、義なる者はいよいよ義をおこなひ、淸き者はいよいよ淸くすべし。一二 視よ、われ報をもて速かに到らん、各人の行爲に隨ひて之を與ふべし。一三 我はアルパなり、オメガなり、最先なり、最後なり、始なり、終なり。一四 おのが衣を洗ふ者は幸福なり、彼らは生命の樹にゆく權威を與へられ、門を通りて都に入ることを得るなり。一五 犬および咒術をなすもの、淫行のもの、人を殺すもの、偶像を拜する者、また凡て虛僞を愛して之を行ふ者は外にあり。

一六 われイエスは我が使を遣して諸教會のために此等のことを汝らに證せり。我はダビデの蒴蘖また其の裔なり、輝ける曙の明星なり』

一七 御靈も新婦もいふ『來りたまへ』聞く者も言へ『きたり給へ』と、渴く者はきたれ、望む者は價なくして生命の水を受けよ。

一八 われ凡てこの書の預言の言を聞く者に證す。もし之に加ふる者あらば、神はこの書に記されたる苦難を彼に加へ給はん。一九 若しこの預言の書の言を省く者あらば、神はこの書に記されたる生命の樹、また聖なる都より彼の受くべき分を省き給はん。

二〇 これらの事を證する者いひ給ふ『然り、われ速かに到らん』アァメン、主イエスよ、來りたまへ。

二一 願くは主イエスの恩惠、なんぢら凡ての者と偕に在らんことを。

新約聖書をはり

聖書地圖索引

1、古代の世界、洪水後の國民分布推定圖及族長時代のカナン五卷時代圖
2、エジプトとシナイ半島及イスラエル歸國旅行圖
3、十二支族に分れたるカナン及ダビデとソロモンの領土
4、アッシリヤ及カナン附近の諸國、ユダヤ人俘囚地圖及ユダとイスラエル王國
5、パレスチナ地勢圖
6、パレスチナ（北部）
7、パレスチナ（中部）
8、パレスチナ（南部）
9、新約聖書時代のパレスチナ及マカベヤ時代のパレスチナ
10、今のエルサレム、昔のエルサレム
11、エルサレム附近
12、パウロの旅行地と初代教會地圖

—索引例—

アイ　3—（第三圖）5ハ　の横縱十字に結ばるゝ處の圖内を見よ

聖書地圖索引

アノ部

アイ……3—5ハ
アイノン……7—3ロ
アカヤ……9—5ハ
アクサフ……11—1ロ
アクジブ……7—2ハ
アクメア、北……9—4ハ
アクメア、南……12—2ハ
アクラ（エルサレム）……6—3イ
アクラビム……3—2ハ
アケルダマ……6—2イ
アシケナズ……9—2ハ
アシケロン……4—1ハ
アシタロテ、カルナイム……4—2ハ
アシドド（アゾド）……10—3ニ
アツヤ……4—3ハ
アジヤ（ロマ領）……3—6ハ
アズマウテ……8—3ハ
アセル……9—6ハ
アソス……10—4ロ
アゾト（アシドド）……1—3ホ
アゾト山……3—5ロ
アダダ……4—3イ
アダマ……4—3イ
アダミ……3—5ロ
アダム……9—3ホ
アタリヤ……4—1ニ
アタロテ……3—3ハ
アタロテ（ルベン）……8—2ニ
アツコ（トレマイ）……3—5ニ
アシドド（アゾド）……7—3ロ
アツヤ……12—2ホ
アジヤ（ロマ領）……7—3ハ
アズマウテ……3—4ニ
アセル……6—3ロ
アソス……3—3ニ
アゾト（アシドド）……7—1ハ
アゾト山……8—3ハ
アダダ……3—6ハ
アダマ……7—3ロ
アダミ……9—6ホ
アダム……9—5ロ
アタリヤ……8—1イ
アタロテ……12—2ニ
アタロテ（ルベン）……3—3ハ
アツコ（トレマイ）……11—3ロ
アツシリヤ……12—2ホ
アテネ……1—ニホヘ
アドミム……9—5ロ
アドライム……8—1イ
アドラミテオ……4—3イ
アドラム……4—2ハ
アナトテ……3—5ロ
アドリヤ……6—3イ
アナニヤ……12—3ヘ
アナブ……1—3ニ
アニム……4—3イ
アネル……3—5ハ
アバナ……11—3ハ
アバナ川……8—1ハ

アバリム山……9—1ホ
アビエル……3—5ニ
アビメレク……8—1ニ
アハワ（アヲ）……9—5ニ
アピオポロ……4—2ロ
アビム……12—1イ
アビレネ……1—3ト
アブドン或はヘブロン……6—1ハ
アブリカ……9—1ホ
アベク……3—2ハ
アヘラブ……6—2イ
アベルベテマアカ、アベルマイム……9—2ハ
アベルシッテム……1・12
アベルメホラ……3—3ニ
アポロニヤ……6—3ロ
アマレク……7—2ハ
アムピポリス……3—4ニ
アモリ……7—2イ
アラデ……9—4ロ
アラバ……12—1ハ
アラビヤ……9—6ニ
アラブ……8—2ニ
アラム（或はスリヤ）……3—6ニ
アララテ山……2—3ヘ
アルキ……1—4ハ
アルゴブ……8—2ニ
アルシ……3—3ホ
アルノン川……2—4ホ
アルパ、キリアテアルバを見よ……9—6ニ
アルパグサデ……11—1イ
アルパテ……7—3ロ
アルマ……4—1ハ
アルメニヤ町（エルサレム）……1—3ニ
アルモン或はアレメテ……3—6ハ
アルワデ……4—3イ
アレキサンデリヤ……8—3ハ
アロエル（ユダ）……9—6ハ
アロエル、アルノン川の……4—2イ
アレメテ……3—6ホ
曠野……11—3ロ
アワ……8—1ハ
アンテオケ（ヒシデヤの）……9—5ハ
アンテオケ（スリヤの）……8—2ハ
アンテパトリス……3—5ハ
ヘブロン……12—4ホ

アシトニア（エルサレム）……9—4ロ
アンモニ……10—2ホ

イ　ノ　部

イコニオム……3—5ニ
イスパニア……4—3イ
イスラエル（國）……7—3ニ
イタリヤ……12—2ヘ
イツサカル……1—3イ
泉の門（エルサレム）……3—3ハ
イツリヤ……1—3ロ
イドマヤ……12—2イ
イブレアム……4—1ニ
イヨン……3—6ホ
イルピエル……4—1ニ
イルリコ……1—3ロ
イロン……12—2ヘ
インダス川……9—6ハ
印度……8—3ロ
印度……12—4ヘ
印度洋……7—1ハ

ウ　ノ　部

ウイアドロロサ……3—2ニ
魚の門（エルサレム）……9—2ニ
ウヅ……9—5ロ
馬の門（エルサレム）……8—2ロ
ウンマ……3—5ロ

エ　ノ　部

英國敎會……9—5ロ
英國墓地……8—1ロ
エクロン……7—3イ
エグロン……3—5ロ
エジオンゲベル……10—4イ
エシテモア……10—3イ
エツプト……1・2・12
エツプト川……2—1ホ
エジプトのピラミッド……3—7ニ
エシヤン……2—3ハ
エスセネの門（エルサレム）……10—4ニ
エタム……8—2ロ
エタム……11—5ロ
エテル……2—2ニ
エデレイ……8—2ロ
エドム……3—3ホ
エド……6—2ロ
エドム……7—1ニ
エバル山……9—3ホ
エフライム……3—7ニ
エフライム……2—2ト
エフライム山……7—3ハ
エフライム……4—3イ
エフライム山……1—3ト
エフライムの門（エルサレム）……4—1ニ
エフライム（オフラ）……3—4ハ
エフラタ……9—5ハ
エペソ……9—4ハ
エベツ……7—3ロ
エマオ（ニコポリ）……7—3ロ

エミ……9—5ロ
エラ谷……1—3チ
……3—5ハ
……8—1ロ
エラテ……9—5ハ
……2—3ト
エラム……3—7ホ
……1—3ホ
エリム……4—2ニ
エルサレム或はサレム……2—3ニ
エルサレム……1—3チ
……2—1ト
……3—5ハ
……3—7ホ
……4—3イ
……4—1ニ
……8—1ハ
……9—5ハ
エルサレムのロシヤミッション……9—6ホ
エルサレムの神殿……11—3ロ
エルテケ……10—3ホ
……7—3ロ
エレアサ……8—1ロ
エレアレ……11—2イ
……3—5ニ
エレク……12—4ヘ
エレフ……8—1ニ
エロン……9—5ニ
エロンベテハナン……4—3ハ
エンガンニム……11—1ロ
エンゲテ……7—3ロ
……11—3ロ
……3—4ハ
……7—1ロ
……9—4ハ
……3—6ハ
……8—2ハ
……9—6ハ
エンシメシ……11—4ハ
エンタップア……7—3ロ
エンドル……9—4ハ
……3—3ハ
エンハダ……7—1ロ
……9—3ハ
エンリンモン……7—1ロ
……11—3ロ
エンロゲル……10—3ホ
……9—6ロ
……8—2ロ
……3—6ロ
……7—1ロ
……9—3ハ
……7—1ロ
……3—3ハ
……9—4ハ
……7—3ロ
……11—4ハ
……9—6ハ
……8—2ハ
……3—6ハ
……9—4ハ
……7—1ロ
……3—4ハ
……11—2イ
……7—3ロ
……11—3ロ
……4—3ハ
……9—5ニ
……8—1ニ

オノ部

オノ……7—3イ
オフニ……7—3イ
……11—1ロ
オフラ（エフライム）……3—5ハ
……7—3ロ
……11—1ハ
オフラ……7—2ロ
……1—5ト
オフル……10—3ロ
オペル……10—3ホ
……3—5ハ
オリブの山……8—1ハ
……9—5ハ
……10—2ハ
……11—3ロ
オロンテス河……4—2イ
……2—2ハ
オン……4—3イ
……3—7ホ
……3—5イ
……2—1ヘ
……1—3ト
ガザ……8—2ハ
……2—2ハ
カイロ……12—2ヘ
カイザリヤ（カパドキヤ）……9—4ロ
……7—1イ
カイザリヤ……3—3ハ
……9—3ハ
カイン……6—3イ
……9—3ハ
……1—3ニ
……3—5ハ
……8—1ハ
……10—4ロ
……11—4ハ
……9—5ハ
……3—5ロ
……7—3ロ
……8—1ハ
……3—6ホ

カノ部

カスル……1—3ニ
……3—5ロ
ガゼル……7—3イ
……8—1ロ
ガダラ……6—3ロ
……9—3ニ
ガテ……4—3イ
……8—1ロ
……9—5ロ
カデシ……3—6ホ
……4—3イ
ガテヘベル……4—1ニ
……6—3ロ
カデシバルネヤ……2—2ヘ
……4—3イ
ガド……3—4ニ
カドモニ……1—2チ
カナ……3—2ハ
カナ川……3—4ハ
……7—3イ
カナン……1—3ニ
……1—2チ
カパドキヤ……4—1イ
……4—3イ
カフトリ……2—1ト
……12—2ヘ
カフトル或はハムの地……1—3ハ
……3—6ホ
カブル……3—3ハ
……3—3ハ
カペナウン……1—2チ
……9—6ハ
……8—3ロ
……3—6ハ
……4—3ハ
……4—3ハ
……1—3ホ
……4—3ハ
……4—1イ
……4—2イ
……10—2ホ
……9—3ニ
……6—3ロ
……9—3ハ
……12—3ヘ
……9—6ホ
……9—3ハ
……6—3ロ
……11—4ロ
……12—2ヘ
……4—2ロ
……9—3ニ
……6—3ロ
……3—3ハ
……3—5ハ
……2—1ハ
カラ……3—6ホ
……3—3ハ
……1—2チ
……9—6ハ
……8—3ロ
……3—6ハ
……4—3ハ
……4—1イ
……4—3ハ
……1—3ホ
……4—3ハ
……7—3イ
……3—4ハ
……3—2ハ
……1—2チ
……3—4ニ
……4—3イ
……6—3ロ
……2—2ヘ
……4—1ニ
……4—3イ
……3—6ホ
……9—5ロ
……8—1ロ
……4—3イ
……9—3ニ
……6—3ロ
……3—3ハ
……4—1ロ

キノ部

カルメルのヨクネアム……7—1ロ
……3—3ハ
……9—3ハ
……6—3イ
……4—3イ
……4—1ニ
汽車停車場（エルサレム）……10—4イ
キシン川……3—3ハ
……6—3イ
……9—3ハ
キツテム……1—3ニ
……3—5ハ
ギデロン川……8—1ハ
……9—5ハ
ギデロン谷……10—4ロ
……10—4ハ
……11—4ハ
ギベア或はゲバ……8—1ロ
……11—2ロ
ギベオン……3—5ハ
……7—3ロ
……8—1ハ
……9—5ハ
ギベトン……11—2ロ
……7—3ロ
……3—3ハ
ギボン（エンロゲル）……10—3ホ

ギムゾ……7—3イ
キヨス……12—2ニ
キリアタイム……3—5ニ
キリアデ……8—2ニ
キリアテアルバ……11—3イ
キリアテヤリム……1—3ト
……3—5ハ
……8—1ロ
キリキヤ……9—5ハ
……4—1イ
……12—2ヘ
キリキヤ……12—3ト
ギルガシ……1—3チ
ギルガル（ベニアミン）……2—1ト
……3—5ハ
……7—3ハ
ギルガル（エフライム）……8—1ハ
……9—5ハ
……3—4ハ
……7—3ロ
ギルガル（カナ川の近く）……9—4ハ
……3—4ロ
ギルボア山……7—2イ
……3—4ハ
……1—3チ
……4—1ニ
……7—1ロ
……9—4ハ
ギレアデ……3—4ニ
……4—3イ
……7—2ハ
……9—4ニ
ギレアデのラモテ……9—6ホ
……3—4ニ
……4—1ニ
……7—2ニ
……9—4ニ
キンネレテ海……1—2チ
……3—3ニ
……3—6ホ
……4—1ニ
金の門（エルサレム）……6—3ロ
……10—2ロ

ク　ノ　部

クシ（エテオピヤ）……1—4ニ
クニド……12—2ニ
……12—3ヘ
クプロ……12—3ニ
クラウダ……9—4ニ
クリスチヤン町（エルサレム）……10—2イ
……8—1ロ
クレテ……12—3ニ
……12—3ハ
クレネ……12—3ニ
……4—1ニ
……9—4ハ
……7—2ロ

ケ　ノ　部

ケサロン……8—1ロ
ケスロテ……3—3ハ
ゲシエル……3—2ニ
……6—1ハ
ゲツセマネ……10—2ハ
……10—2ヘ
ケデシ……6—3ロ
ケデシキシヨン……7—1ロ
ケデシナフタリ……3—2ニ
……6—2ロ
ゲデラ……9—2ニ
……8—1ロ
ケデロン……11—2ロ
……11—4ハ
ゲドル……3—5ハ
……8—1ロ
……11—6イ
ケナテ……3—6ホ
……6—3ロ
ゲネザレ湖……9—3ニ
……7—2ロ
ゲバ……3—5ハ
ゲバ或はギベア（ベニヤミン）……8—1ハ
……11—2ロ
ゲバル……1—2チ
……3—6ホ
ケバル川……4—2ロ
ケバル或はハンモン或はアイ

ケピラ……11—1ロ
……8—1ロ
……11—3イ
ゲラル……1—3ト
……3—6イ
……4—3イ
ケリオテ……8—2イ
……4—1ニ
ケリヨム山……1—3チ
……3—4ハ
……4—1ニ
……7—2ロ
ゲルマニヤ……9—4ハ
ケンクリヤ……1—2ロ
……12—2ハ

コ　ノ　部

紅海……2—5ホ
紅海岸の陣營……2—3ホ
黑海……1—3ニ
ゴザン……4—2ロ
コス……12—2ニ
コセバ……8—2ハ
ゴセン……11—6イ
……2—2ハ
ゴメル……1—2ニ
コラ……7—2ハ
コラジン……6—3ロ
ゴラン……9—3ニ
……3—3ニ
……6—3ハ
コリント……12—2ハ
……10—2ホ
ゴルゴタ（髑髏）……6—3ハ
……3—5ニ
コロサイ……12—2ホ

サ　ノ　部

ザアナイムの野……6—3ロ
ザボン……7—1ハ
……8—1ロ
ザノアヨシユア15の34……8—2ロ
ザノアヨシユア15の56……3—4ハ
サマリヤ……4—1ニ
……4—3イ
……7—2ロ
……9—4ハ
……9—6ホ
ザムズミ或はズジ……12—3ヘ
……1—3チ
サモス……12—2ニ
……12—2ニ
サラミス……12—3ヘ
サリム……7—2ロ
……9—4ハ
サルカ……3—6ホ
……4—1ニ
サルデス……12—2ホ
サルモネ……12—3ニ
……10—2ホ
髑髏（カルヴアリ）……9—2ハ
ザレタン……7—3ハ
ザレパテ……6—1イ
……1—3チ
サレム或はエルサレム……3—2ハ
……9—2ハ

シ　ノ　部

シオン……10—3イ
……10—3ニ
……6—3ロ
シオン……7—1ロ
シオンの門（エルサレム）……10—3ロ
シオンの山通（エルサレム）……10—3ロ
死海……2—1ト
……4—3イ
……8—2ハ
……9—6ハ
シケム……1—3ト
……3—4ハ
……4—1ニ
……4—3イ
……7—2ロ
……9—4ハ
シツテム、谷……3—5ニ
……8—1ニ
……9—5ニ

シドン……1—2チ
3—6ホ
3—1ハ
4—2イ
4—1ニ
6—1ロ
9—1ハ
12—3ヘ
シナイ山……2—4ホ
シナイの曠野……2—4チ
シナル……2—4ホ
1—3ニ
4—3ハ
シバ（オフル）……1—4ニ
シバ（シメオン）……8—3ロ
ジフ……3—6ハ
8—2ハ
9—6ハ
壊海……1—3チ
3—6ハ
3—7ホ
8—2ハ
壊町……3—6ハ
9—6ハ
シメオン……3—6ロ
シヤミル……8—2ロ
シヤルヘン……3—6ロ
8—2イ
シヤロンの野……3—4ロ
7—2イ
9—4ロ
シユシヤン……4—3ニ
シユネム……3—3ハ
4—1ニ
7—1ロ
9—3ハ
シユル（エジプト）とシユルの路……2—2ニ
2—2ト
12—2ト
8—1ロ
10—2ハ
8—2ロ
12—2イ
3—4ハ
4—2イ
6—2イ
9—4ロ
7—3ロ
10—3ロ
10—4ホ
10—3ハ
2—4ホ
10—3ロ
シロアムの池……
シロアムの村……
シンの曠野……
神殿通（エルサレム）……

ス　ノ部

スエズ……2—2ニ
スエズ灣……2—4ニ
スエズ運河……2—2ニ
スカル……3—4ハ
7—2ロ
9—4ハ
スカンデイナビヤ……1—1ロ
スクテヤ……1—2ホ
スコテ……2—2ハ
3—4ニ
7—2ハ
ズジ或はザムズミ……9—4ニ
隅の門（エルサレム）……1—3チ
スミルナ……10—3ニ
スリヤ（アラム）……12—2ニ
3—6ホ
4—2イ
4—1ニ
9—5ホ
スリヤ沙漠……12—3ト
4—2ロ

セ　ノ部

聖ステパノの門……10—2ロ
セイル山（エドム）……2—2ト
セイル山……8—1ロ
セク……11—2ロ
セパ……1—4ニ
セパル……1—4ホ

ゼパテ……3—7ハ
セパルワイム……4—3ハ
ゼブロン……3—3ハ
セルキヤ……12—2ヘ
ゼレデ川……2—1ト
ゼレデ谷……3—6ニ
9—6ニ
ゼレデ……8—3ハ
11—1ロ

ソ　ノ部

ソアル……3—5ニ
ソアン……8—1ニ
ソヘレテ……9—5ニ
ソラ……2—2ハ
10—4ホ
3—5ロ
8—1ロ
9—5ロ
ソレクの谷……3—5ロ
8—1ロ
9—5ロ

タ　ノ部

タアナク……3—3ハ
7—1ロ
9—3ハ
タアナテシロ……7—2ロ
大海（地中海）……1・2・9・12
大砂漠……3—6ホ
大スルテス（洲）……12—4ロ
タデモル……3—6ホ
ダニヤン……4—2イ
ダバセテ……6—2イ
タパネス……6—2イ
ダビデの墓……10—3イ
ダビデ町……2—2ニ
ダベラ……3—3ハ
10—3ロ
タボル山……1—3チ
ダマスコ……6—3ロ
4—1ニ
3—3ハ
7—1ロ
9—3ハ
1—2チ
ダマスコ……3—6ホ
3—1ホ
4—2イ
6—1ニ
9—1ホ
9—6ホ
ダマスコの門（エルサレム）……12—3ト
ダマスコ街（エルサレム）……10—2ロ
10—2ロ
タルシシ……1—3イ
タルソ（キリキヤ）……4—1イ
12—2ヘ
ダルマテヤ……12—1ロ
ダン……3—5ロ
ダン或はライシ……3—2ニ
3—6オ
4—2イ
4—1ニ
6—2ロ
9—2ニ
ダンナ……8—2ロ

チ　ノ部

ヂクラグ……3—6ロ
チグリス川……9—6ロ
7—1ロ
9—3ハ
1—2ニ
ヂツの阪……4—3ハ
8—2ハ
チンの曠野……2—2ヘ
3—7ハ

ツ　ノ部

ツロ……1—2チ
3—2ハ

ツロ……3—6ホ
……4—2イ
……4—1ニ
……7—3ハ

テノ部

テアテラ……12—2ニ
デカポリス……7—1ニ
……9—3ニ
テコア……3—5ハ
……8—1ハ
……9—5ハ
テコアの曠野……11—6ロ
……11—6ハ
テサロニケ……12—1ハ
デダン……1—4ホ
デビル……3—6ロ
……8—2ロ
……9—6ロ
テフサ……11—3ハ
……3—5ホ
……4—2ロ
デブラ……7—2ロ
……6—2ロ
テベツ……3—4ハ
……7—2ロ
……9—4ハ
テベリヤ……6—3ロ
デボン……9—3ニ
……2—1ト
……3—6ニ
……4—3イ
……8—2ニ
……9—6ニ
……1—4ニ
テマ……3—5ロ
テムナ……7—3ロ
……8—1ロ
テムナ（リンモン）……7—3ロ
……6—3ロ
テムナテセラ……3—4ハ
……7—3ロ
テラコニテ……6—2ハ
……9—3ホ
テラス……1—3ハ
……3—4ハ
テルザ……7—2ロ
……9—4ハ
……12—2ヘ
デルベ……9—6ロ
……11—3ハ
……8—2ロ
……7—2ロ
ドタニム……4—2ロ
……3—5ホ
ドタン……3—4ハ
……6—2ロ
……7—2ロ
……9—4ハ
……12—2ヘ
トパル……1—3ニ
……3—4ハ
……4—3イ
……7—2ロ
……9—4ハ
……12—2ニ
トプ……3—3ニ
……7—1ハ
……2—4ホ
ドフカ……2—2ト
……3—7ニ
……3—7ホ
トベル……9—7ニ
……3—6ロ
ドマ……8—2ロ
……7—1イ
……9—3ロ
……6—3イ
トレマイ（アッコ）……9—3ハ
……9—6ホ
……12—2ニ
……12—2ニ
……12—3ヘ
ドル……9—3ロ
……7—1イ
……8—2ロ
……3—6ロ
……9—7ニ
……3—7ホ
……3—7ニ
……2—2ト
……2—4ホ
……7—1ハ
……3—3ニ

ナノ部

トロアス……8—1ロ
……7—3イ
トロゲリオム……7—3ハ
……7—3ニ
ナアマ……1—4ハ
……2—3ハ
……4—3イ
……7—1ロ
……9—3ハ
……6—3イ
ナアラ……3—3ニ
……7—3ロ
……9—4ハ
ナイル川……1—3ニ
……3—4ハ
……4—3イ
……7—2ロ
……9—4ハ
ナイン……7—3ロ
……8—1ロ
……9—3ハ
……6—3イ
ナザレ……3—6ロ
……7—3ロ

ナハラル……9—3ハ
……6—3ロ
ナフタリ……3—3ハ
ナフト……1—4ハ

ニノ部

ニコポリ（エマオ）……8—1ロ
……9—5ロ
ニネベ……1—3ニ
……4—1ロ

ネノ部

ネアポリス……12—1ニ
ネジブ……8—2ロ
ネトパ……11—4ロ
ネパヨテ……1—4ニ
ネパラテ……7—3イ
ネフトア……8—1ハ
……11—5イ
ネボ……8—1ロ
ネボ山……2—1ト
……3—5ニ
……4—2ニ
……8—1ニ
……9—5ニ

ハノ部

パアラテ……7—3ロ
パアルシヤリシヤ……7—2ロ
パアルゼボン……2—2ニ
パアルタマル……11—2ロ
パアルハゾル……7—3ロ
パアルメオン或はベテメオン……8—1ニ
ハウラン……3—3ホ
……6—3ハ
……7—1ニ
……6—3ニ
……4—1ニ
パシヤン……3—2ホ
……4—3イ
……6—2ホ
……9—2ホ
ハゼロテ……2—4ヘ
ハゾル……3—2ハ
……6—2ロ
……9—2ハ
……11—3ロ
ハダテリンモン……7—1ロ
……9—3ハ
パタラ……12—2ホ
パダンアラム……1—3ニ
……4—2ロ
ハデテ……7—3イ
パテロス……1—4ニ
パトモス……12—2ニ
ハバライム……7—1ロ
ハビラ（アラビヤ）……1—4ニ
ハビラ（クシ）……1—5ニ
バビロン（エジプト）……2—2ハ
バビロン……4—3ハ
バビロン……4—3ハ
バベル……1—3ニ
パボス……12—3ヘ
ハマテ……3—6ホ
……4—2イ
パモテバアル……8—1ニ
ハラ……4—2ロ
……4—2ハ
パラ……11—3ハ
ハラン……1—3ニ
……4—1ロ
パランの曠野……2—2ホ
……3—7ホ
ハリ……6—2イ
……3—1ホ
パルパル（河）……6—1ニ
……9—1ホ
ハルホル……8—2ロ
……8—2ロ
ハロセテ……3—3ハ
……6—3イ
……9—3ハ
ハチテヤイル（ヤイル村）……3—3ホ
ハンナトン……3—3ハ

パンフリヤ（ピリピカイザリヤ）…… 6—3ロ
ハンマテ …… 12—2ホ
ハンモン …… 3—3ニ
ハンモン …… 6—3ロ
ハンモン …… 3—2ハ
ハンモン …… 6—2イ
ハンモン …… 9—2ハ

ヒノ部

ビザンチユーム …… 12—1ホ
ビシデヤ …… 12—2ホ
ビスガ山 …… 3—5ニ
ビスガの麓 …… 8—1ニ
ビスガの麓 …… 9—5ニ
ビテニヤ …… 8—1ニ
ビテニヤ …… 12—1ホ
ビトム …… 2—2ニ
ビニクス …… 12—3ハ
ビネハスのギベア …… 3—4ハ
ビハヒロテ …… 7—2ロ
ビビ …… 2—2ニ
ヒラデルヒヤ …… 1—2チ
ヒラデルヒヤ …… 7—3ニ
ヒラデルヒヤ（ルデヤ） …… 9—5ニ
ピラトン …… 12—2ホ
ピリピ …… 7—2ロ
ピリピ …… 12—1ニ
ピリポカイザリヤ …… 6—2ロ
ヒンノムの谷 …… 9—2ニ
ヒンノムの谷 …… 10—4イ
ヒンノムの谷 …… 10—4ニ
ヒンノムの谷 …… 10—4ロ

フノ部

フテ …… 1—2イ
フリギヤ …… 12—2ホ
プリタニヤ …… 1—2イ
古き門（エルサレム） …… 10—2ニ

ヘノ部

ベエルシバ …… 2—2ヘ
ベエロテ（ベレヤ） …… 3—6ロ
ヘシボン …… 4—3イ
ヘシボン …… 8—3ロ
ヘシボン …… 9—6ロ
ヘシボン …… 11—1ロ
ベセク …… 1—3チ
ベセク …… 2—1ト
ベセク …… 3—5ニ
ベセク …… 3—6ホ
ベセク …… 4—3イ
ベセク …… 7—2ロ
ベセク …… 9—5ニ
ベセル …… 8—1ニ
ベタバラ …… 9—2ニ
ベタニヤ …… 9—3ニ
ベタニヤ …… 8—1ハ
ベタニヤ …… 9—5ハ
ベツサイダ …… 11—4ロ
ベツサイダ …… 6—3ロ
ベツレヘム …… 9—3ニ
ベツレヘム …… 3—5ハ
ベツレヘム …… 8—1ハ
ベツレヘム …… 9—5ハ
ベツレヘム（セブルンの） …… 11—5ロ
ヘヅロン …… 6—3イ
ヘテ …… 3—7ロ
ヘテ …… 1—2チ
ベテアベン …… 11—1ハ
ベテアベンの曠野 …… 11—1ハ
ベテアナテ …… 6—2ロ
ベテアノテ …… 8—2ハ
ベテエシモテ …… 3—5ニ
ベテカル …… 8—1ニ
ベテガムル …… 9—5ニ
ベテガムル …… 11—4イ
ベテシツダ …… 3—5ニ
ベテシメシ …… 7—1ハ
ベテシメシ …… 3—5ロ
ベテシヤン …… 3—4ハ
ベテズル …… 7—1ハ
ベテズル …… 9—4ハ
ベテズル …… 8—2ロ
ベテダゴン（アセル） …… 11—6イ
ベテダゴン（アセル） …… 3—3ハ
ベテダゴン（ダン） …… 6—3イ
ベテタツプア …… 9—3ハ
ベテタツプア …… 7—3イ
ベテニムラ …… 8—2ロ
ベテニムラ …… 3—5ニ
ベテパゲ …… 7—3ハ
ベテハラン …… 11—3ロ
ベテベオル …… 8—1ニ
ベテベオル …… 3—5ニ
ベテホグラ …… 8—1ニ
ベテホロン …… 3—5ハ
ベテホロン …… 7—3ロ
ベテメオン（或はバアルメオン） …… 8—1ニ
ベテル（ルズ） …… 1—3チ
ベテル（ルズ） …… 3—5ハ
ベテル（ルズ） …… 7—3ロ
ベテル（ルズ） …… 9—5ハ
ベテル（ルズ） …… 11—2イ
ベテン …… 7—1ハ
ヘテのカデシ …… 9—4ハ
ヘナ …… 8—2ロ
ベニエル …… 11—6イ
ベニエル …… 3—3ハ
ベニヤミン …… 6—3イ
ベニヤミン …… 9—4ハ
ベニヤミン …… 7—3ロ
ベニヤミン …… 3—5ハ
ベニヤミン …… 8—1ニ
ベネベラク …… 8—1ニ
ヘブロン（アブドン） …… 3—5ハ
ヘブロン …… 9—5ハ
ヘブロン …… 8—1ハ
ベニケ …… 11—2イ
ベリシテ …… 1—4ト
ベリシテ …… 3—5ニ
ベリシテ …… 7—1ロ
ベリシテ …… 10—3ニ
ベルガ …… 1—3ホ
ベルガ …… 4—3ニ
ベルガ …… 9—5ロ
ベルガモ …… 12—2ホ
ベルシヤ …… 12—2ニ
ベルシヤ …… 1—3ホ
ベルシヤ灣 …… 4—3ニ
ベルシヤ灣 …… 1—4ホ
ヘルモン山 …… 1—2チ
ヘルモン山 …… 3—2ニ
ヘルモン山 …… 3—6ホ
ヘルモン山 …… 4—2イ
ヘルモン山 …… 6—1ハ
ヘルモン山 …… 9—6ロ
ヘルモン山 …… 8—3イ
ベレデ …… 3—6ロ
ベレデ …… 9—2ニ
ベレヤ（ベエロテ） …… 11—1ロ
ベレヤ（マケドニヤ） …… 12—1ハ
ベロク …… 1—2チ
ヘロデの門（エルサレム） …… 3—6ホ
ヘロデの井 …… 10—2ロ
ヘロデの宮殿（エルサレム） …… 7—1ロ
ベリヂ …… 10—3ニ

ホ ノ部

牧者の野……8—1ハ
墓地、聖教會……10—2ロ
ホッコク……3—3ハ
ボヅラ（エドム）……3—7ニ
ボヅラ（モアブ）……9—7ニ
……3—3ホ
……4—1ニ
ポテオリ……9—3ホ
ホル山……12—1イ
ホルマ……4—3イ
ホレブ……2—2ヘ
……2—4ホ
ホレム……2—4チ
……3—2ハ
ホロン……6—2ロ
……9—2ハ
ポント……8—2ロ
……12—1ヘ

マ ノ部

マオン……3—6ハ
……8—2ハ
マグダラ……9—6ハ
……6—3ロ
マケドニヤ……9—3ハ
……1—3ハ
マッケダ……12—1ハ
……8—1ロ
マデア……1—3ホ
マデマンナ……3—3ホ
マナセ……3—4ハ
マナハテ……11—4ロ
マハナイム……1—3チ
……3—4ニ
……4—1ニ
……7—3ニ
マムレ……3—5ハ
マムレの原……8—2ロ
マルタ……12—3イ
マレシヤ……3—5ロ
……8—2ロ
……9—5ロ

ミ ノ部

ミグダルエル……6—2ロ
ミグドル……2—2ニ
ミクマシ……3—5ハ
……7—3ロ
……8—1ハ
……9—5ハ
……11—2ハ
……10—3ホ
水の門（エルサレム）……1—4ニ
ミツライム（エジプト）……
ミデアン……2—3ハ
ミテレネ……2—4ヘ
ミラ……12—2ニ
ミレト……12—2ホ
ミロ（エルサレム）……12—2ニ
ミンニ……10—3ホ
……1—3ホ

ム ノ部

ムシヤ……12—2ニ

メ ノ部

メギドン……3—3ハ
……7—1ロ
……9—3ハ
メシヤ……1—4ニ
……1—3ニ
メセク……4—2ロ
メソポタミヤ……4—2ニ
……3—5ニ
メデア……8—1ニ
……9—5ニ
メデバ……3—4ロ
……2—3ニ
メヤルコン……1—2チ
……3—2ニ
メラ……4—1ニ
……6—2ロ
メロムの水……

……9—2ニ
メンヒス……2—3ハ

モ ノ部

モアブ……2—1ト
……3—6ニ
……4—3イ
モアブのアル……8—3ニ
……3—6ニ
……8—3ニ
……9—6ニ
モアブのキル……2—1ト
……3—6ニ
……8—3ニ
……9—6ニ
モザ……11—3イ
モハメダン墓地（エルサレム）……10—2ロ
モハメダン町（エルサレム）……10—2ロ
モリア……10—2ロ
……10—3ホ
モレの山……3—3ハ
……7—1ロ
……9—3ハ
モーセの泉……2—3ニ

ヤ ノ部

ヤコブの泉……7—2ロ
ヤゼル……8—1ニ
……3—6ロ
ヤツテル……8—2ロ
……9—6ハ
……7—3ロ
ヤニム……6—2ロ
……8—2ハ
ヤノア……3—3ロ
……3—4ハ
ヤハの門（エルサレム）……11—4ロ
ヤピア……1—3チ
ヤブネル……3—5ハ
……2—2ニ
ヤブネル或はヤブネ……6—2ロ
……7—3ハ
……8—1ロ
……9—5ロ
……10—3イ
ヤベシギレアデ……7—3ロ
……7—1ロ
……8—2ロ
……9—6ホ
ヤボク川……3—4ニ
……9—4ニ
……3—4ニ
……7—1ハ
……4—1ニ
……7—2ハ
……9—4ニ
……8—1ロ
……7—2ロ
ヤルムテ（ユダ）……1—3ハ
ヤルムテ……
ヤワン……

ユ ノ部

ユウフラテ川……1—3ニ
……4—2ロ
ユダ……3—5ロ
……8—2ロ
ユダ（國）……3—7ニ
……4—2ハ
ユダの曠野……3—5ハ
ユダヤ……8—1ハ
……9—6ホ
……9—5ハ
ユダヤの沙漠……12—4ヘ
……9—5ハ
ユダヤ町（エルサレム）……10—3ロ
ユダヤの曠野……9—5ハ

エ ノ部

エシヤナ……7—3ロ
……8—3ロ
エシユア……3—3ハ
……7—1ロ
エズレルの谷……9—3ハ
……4—1ニ
エズレル（イツサカル）……3—3ハ
……7—1ロ
……9—3ハ
エブス……1—3チ

エホデ……3—4ロ
エリコ……2—1ト
ヨルダンの野……1—3チ
ヨーロッパ……1—2ハ

ヨノ部

ヨアブの泉……10—4ロ
良き港……12—3ニ
ヨクタン……1—4ニ
ヨゲベハ……3—4ニ
預言者の墓……7—3ニ
ヨシヤパテの谷……10—3ハ
ヨセフの墓……10—2ハ
ヨツパ……11—3ロ
エルエルの曠野……3—4ロ
ヨルダン……1・3・4・6・7・8・9—12—3ヘ

ラノ部

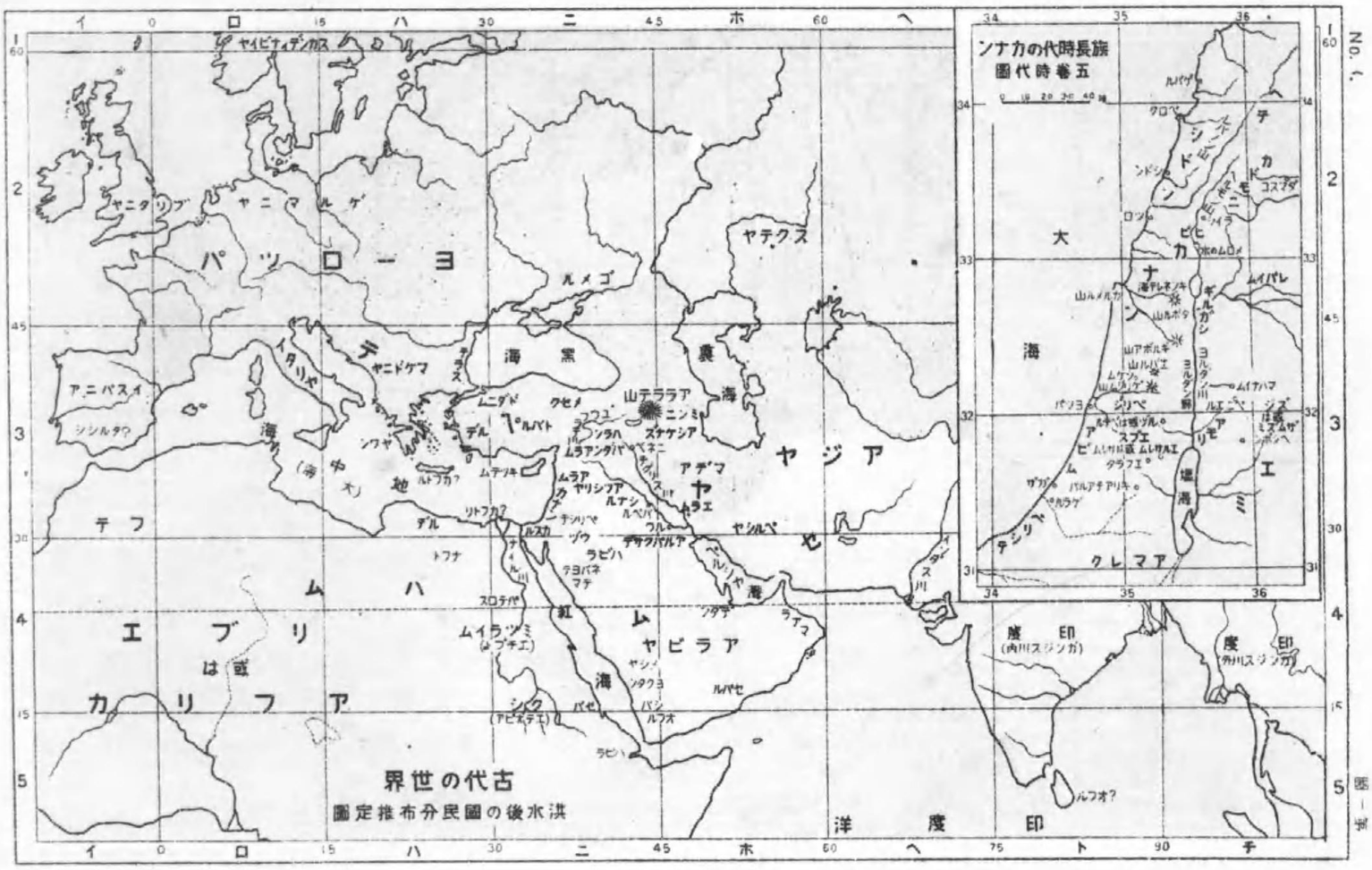
ラアマ……9—6ホ
ライシ……9—4ロ
ライシ或はダン……11—6ロ
ラオデキヤ……7—3イ
ラキシ……4—1ハ
ラケルの墓……3—6ホ
ラサヤ……7—2ロ
ラツコン……7—3イ
ラバテモアブ（モアブのアル）……3—6ニ
ラピテ……7—2ロ
ラマ（ナフタリ）……9—6ニ
ラマ……8—3ニ
ラマ（ベニヤミン）……3—7ホ
ラマテミヅパ……6—2ニ
ラメセス……9—2ロ
ルカオニヤ……12—2ヘ
ルキヤ……12—2ホ
ルステラ……12—2ヘ
ルダ（ロド）……7—3イ
ルヅ（ベテル）……9—5ロ
ルヅ（士師記1の26）……11—1ロ
ルデ……6—1ロ
ルベン……1—3ハ

レノ部

レオンテス河……3—2ハ
レギオン……6—1イ
レセン……9—2ハ
レパイムの谷……12—2イ
レパナ……4—2ロ
レバノン山……11—4ロ
レバノンの谷……7—3ロ
レバノン府……1—2チ
レビデム……3—2ニ
レホボテ……4—1ニ
……3—6ホ
……2—4ト
……3—6ロ
……4—2ロ
……9—6ロ

ロノ部

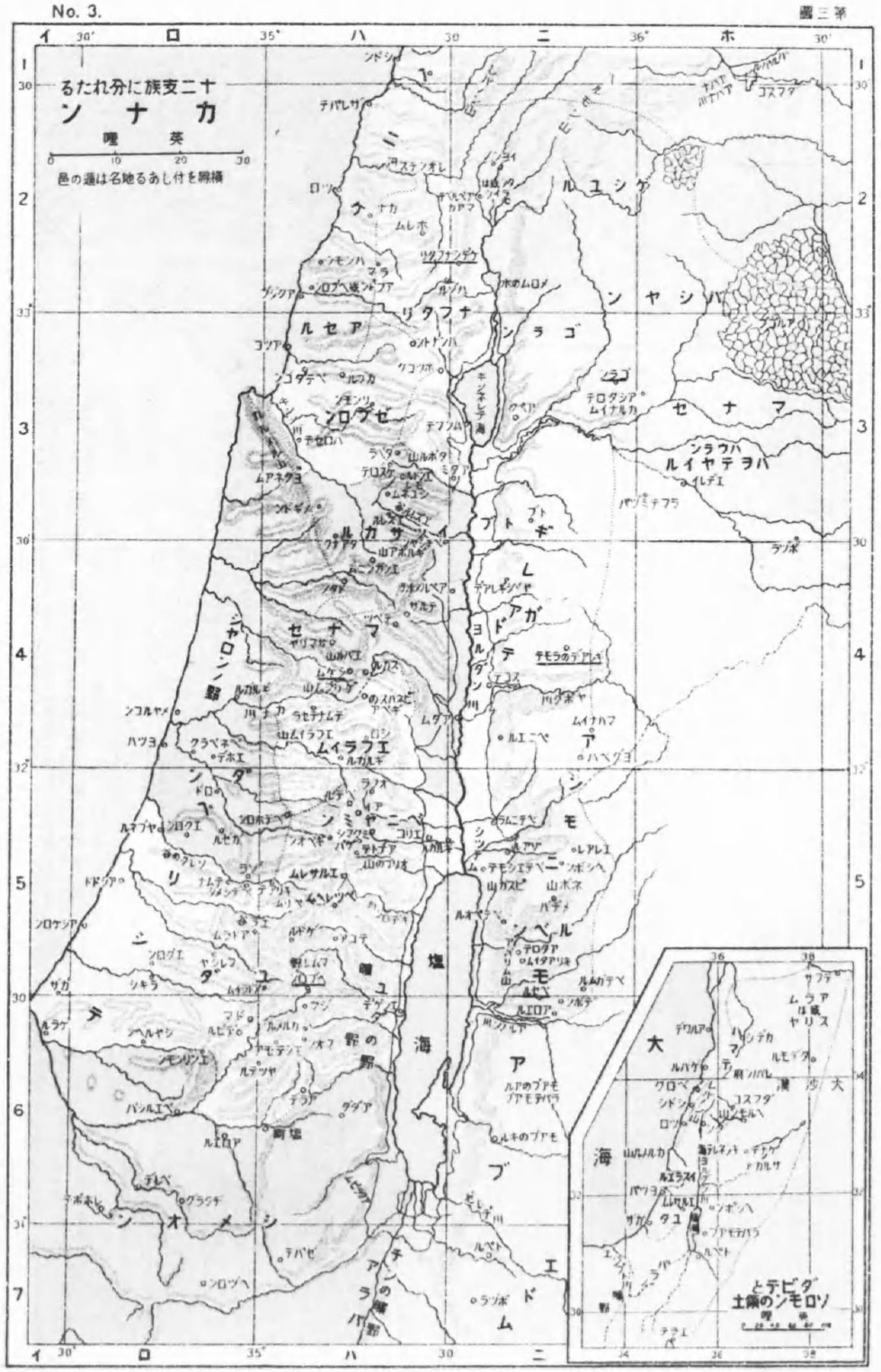
ロド（ルダ）……9—2ニ
ロドス……6—1ロ
ロマ……4—1ニ
……4—2イ
……3—2ニ
……1—2チ
……11—4ロ
……7—3ロ
……3—6ホ
……2—4ト
……3—6ロ
……4—2ロ
……9—6ロ
……3—5ロ
……7—3イ
……12—2ニ
……12—1イ


界世の代古
圖定推布分民國の後水洪
ンナカの代時長旗
圖代時卷五
ヨーロッパ
ヤテクス
ルメゴ
ヤニタリア
ヤニマルゲ
アニバスイ
シシルタ?
テニドケマ
ムニダド
クセメ
山テララア
ニンミ
スナケシア
ムラアンダバ
ベネニ
ムラア
ヤリシフア
ルアシ
ルベバイ
ムラエ
ヤシルベ
ヤジア
アデマ
ヤ
ヤ
ヤ

No. 3.

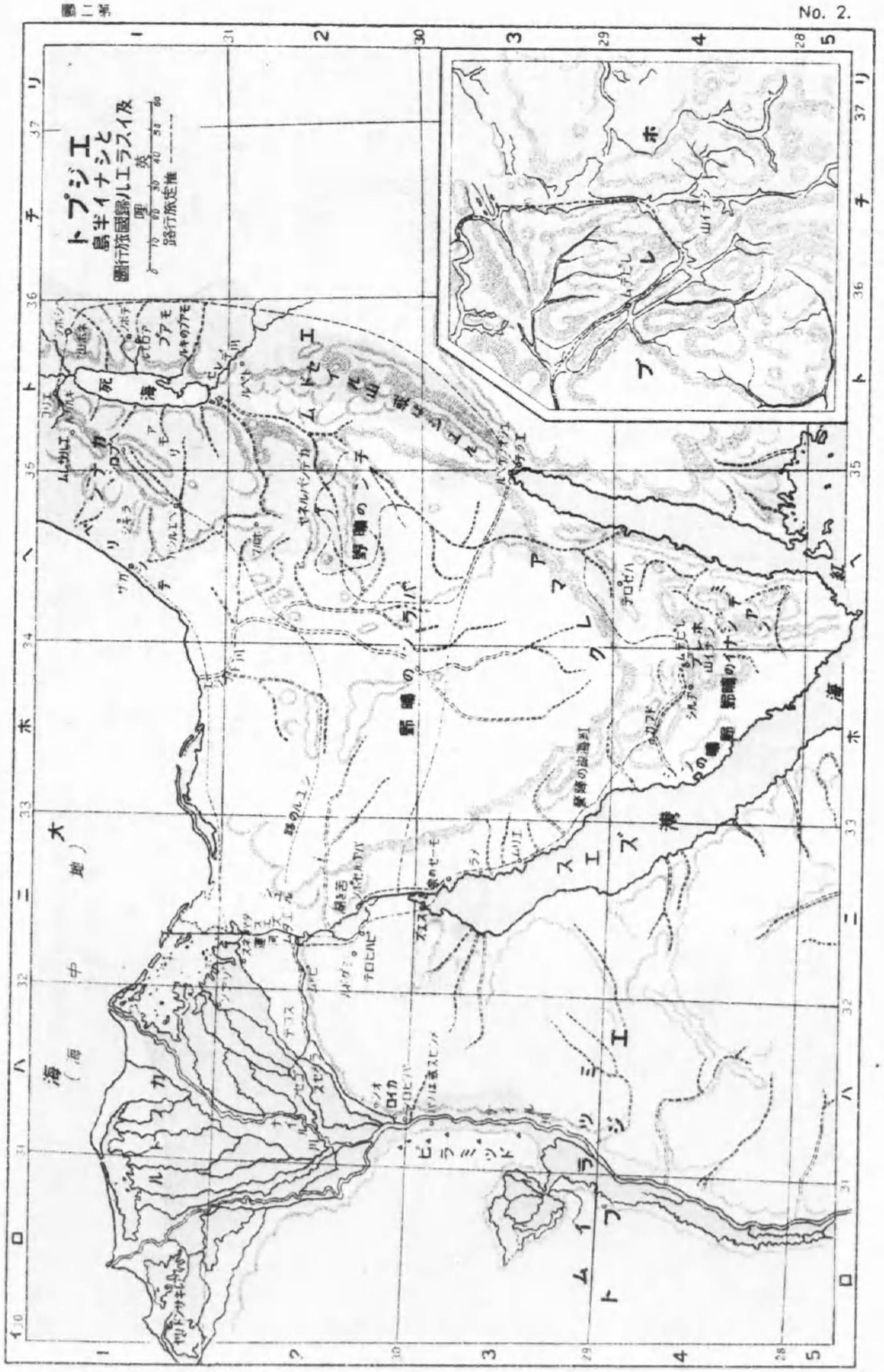
第三圖

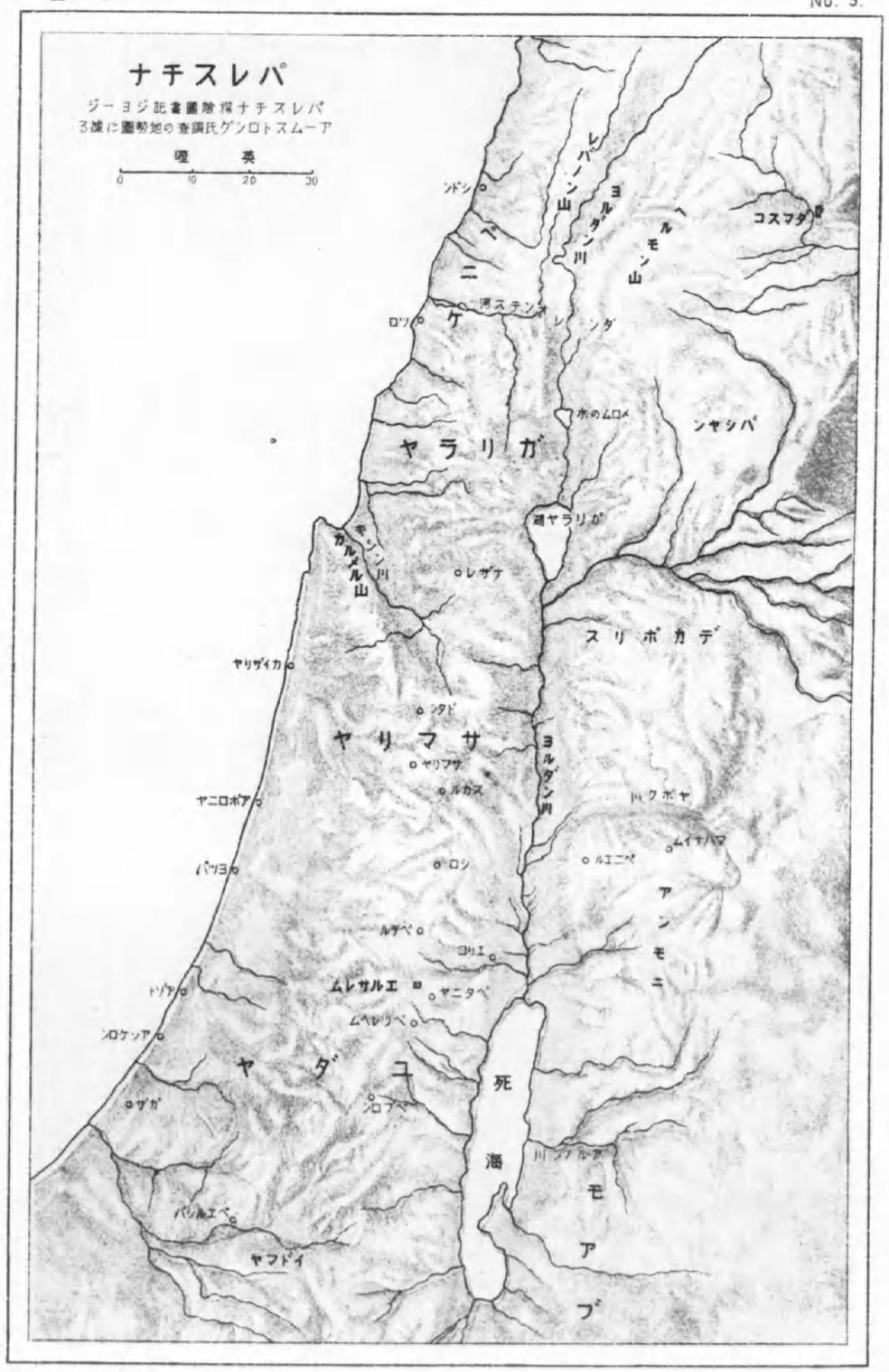
るたれ分に族支二十
ソナカ
哩 英
0 10 20 30
邑の邊は名地るあし付を線横

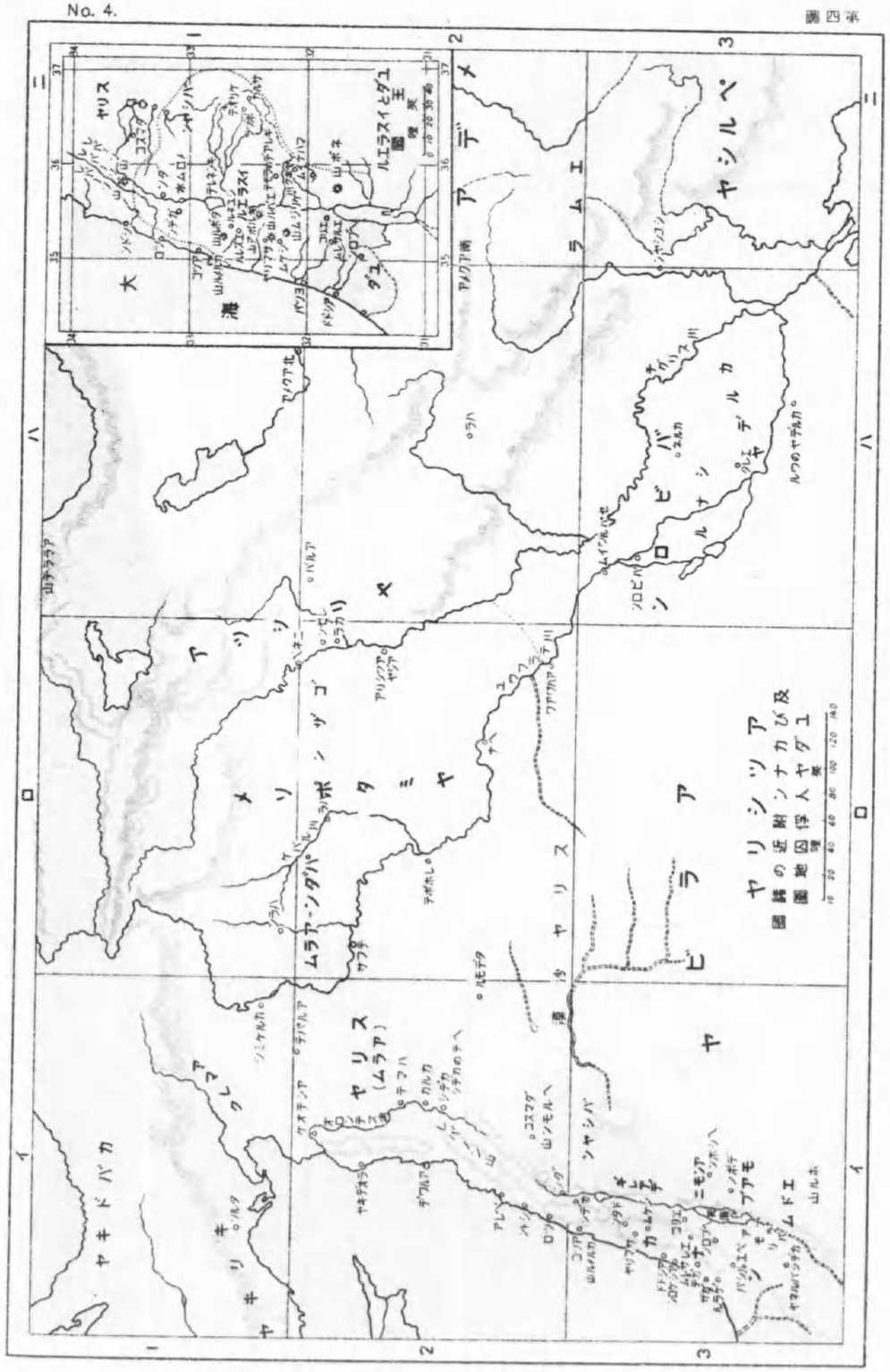


No. 2.

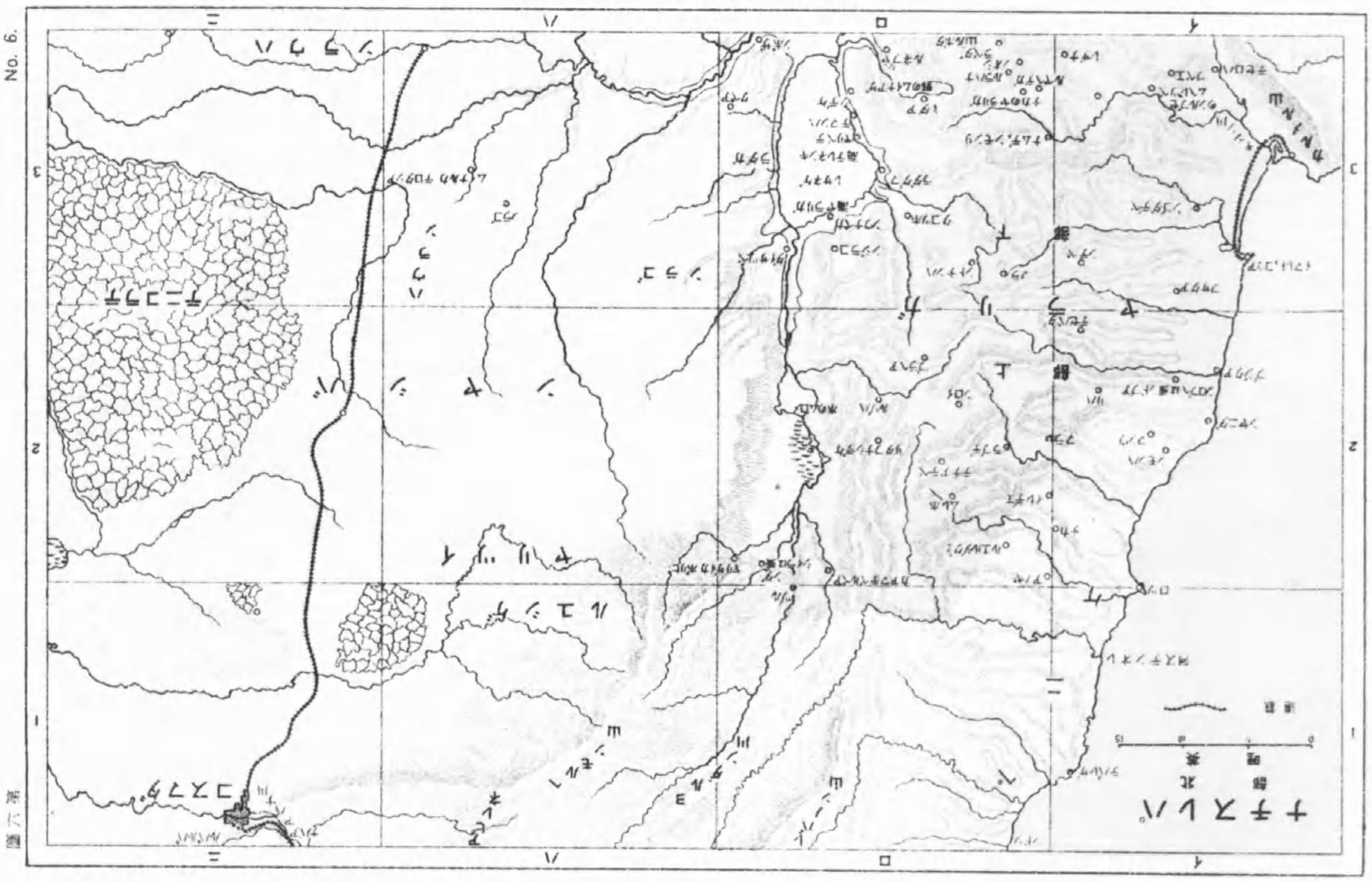
第二圖


トプジエ
島半イナシと
圖行旅國歸ルエラスイ及
哩 英
0 10 20 30 40 50 60
路行旅走惟
死海
野鹽の
野鹽の
野鹽の
ムエルビ
ムエルド
ムエルブ
ムエルビ
ムエルド
ムエルブ
ムエルビ
ムエルド
ムエルブ

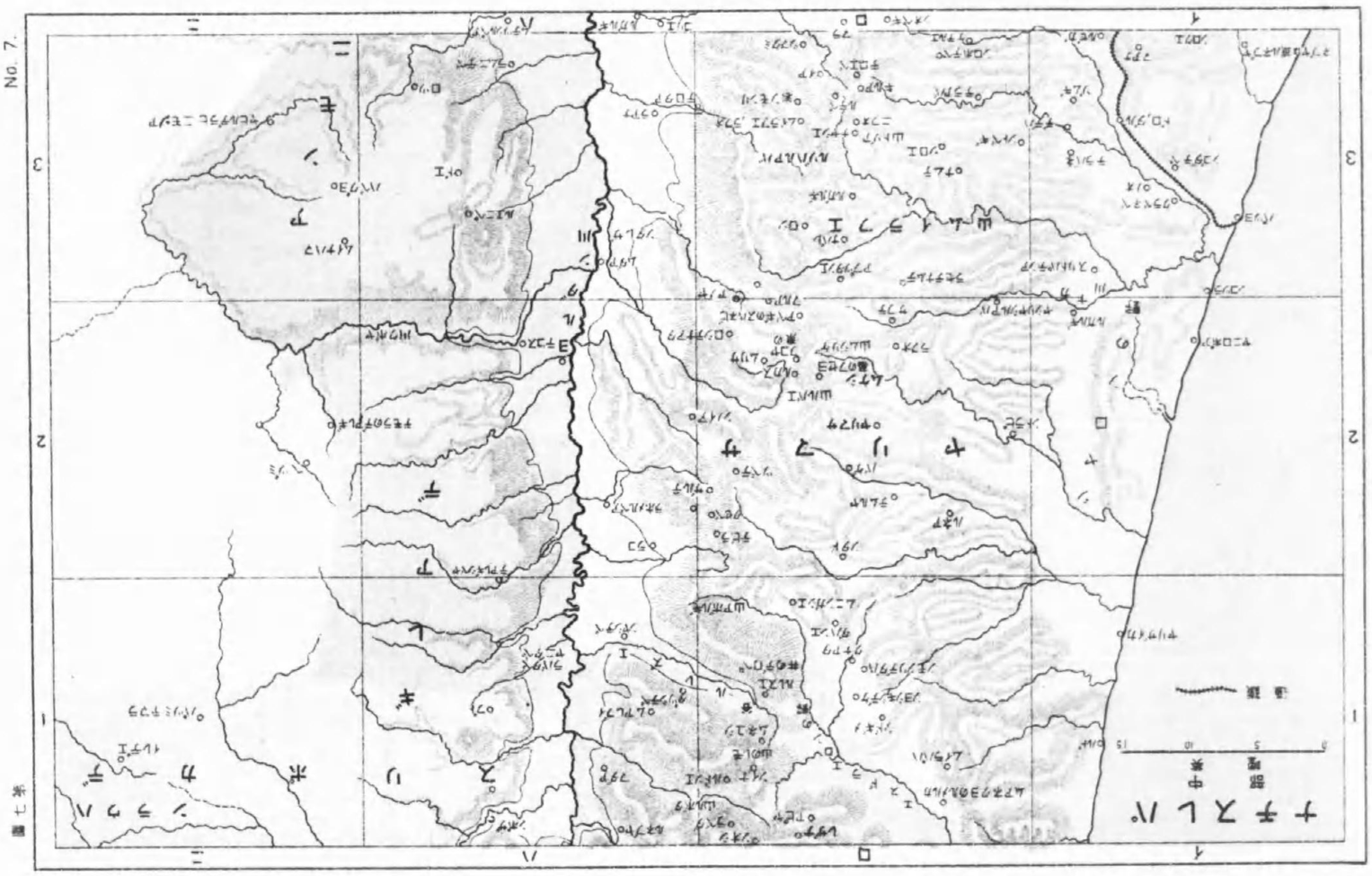



ヤリシツアア
國鐵の近附シナカび及
圖區地囚俘人ヤダユ
ヤリス
ムラナーシダパ
ヤリス（ムラア）
ヤキドバカ
ヤキリキ
ヤキマクア
ヤキスンア
ヤキチラア
ヤキルタ
ヤキ
ヤリスメソポタミヤ
ヤリスラムエ
ヤシルペ
ヤシルカ
ヤシルビロ
ヤシルナ
ヤシルデ
ヤシルバ
ヤシルエ
ヤシルプ
ヤシルモ
ヤシルヘ
ヤシルヤ
ヤシルシ
ヤシルヨ
ヤシルロ
ヤシルム
ヤシルド
ヤシルバ
ヤシルエ
ヤシルシ
ヤシルヤ
ヤシルヤ
ヤシルヤ

No. 6.

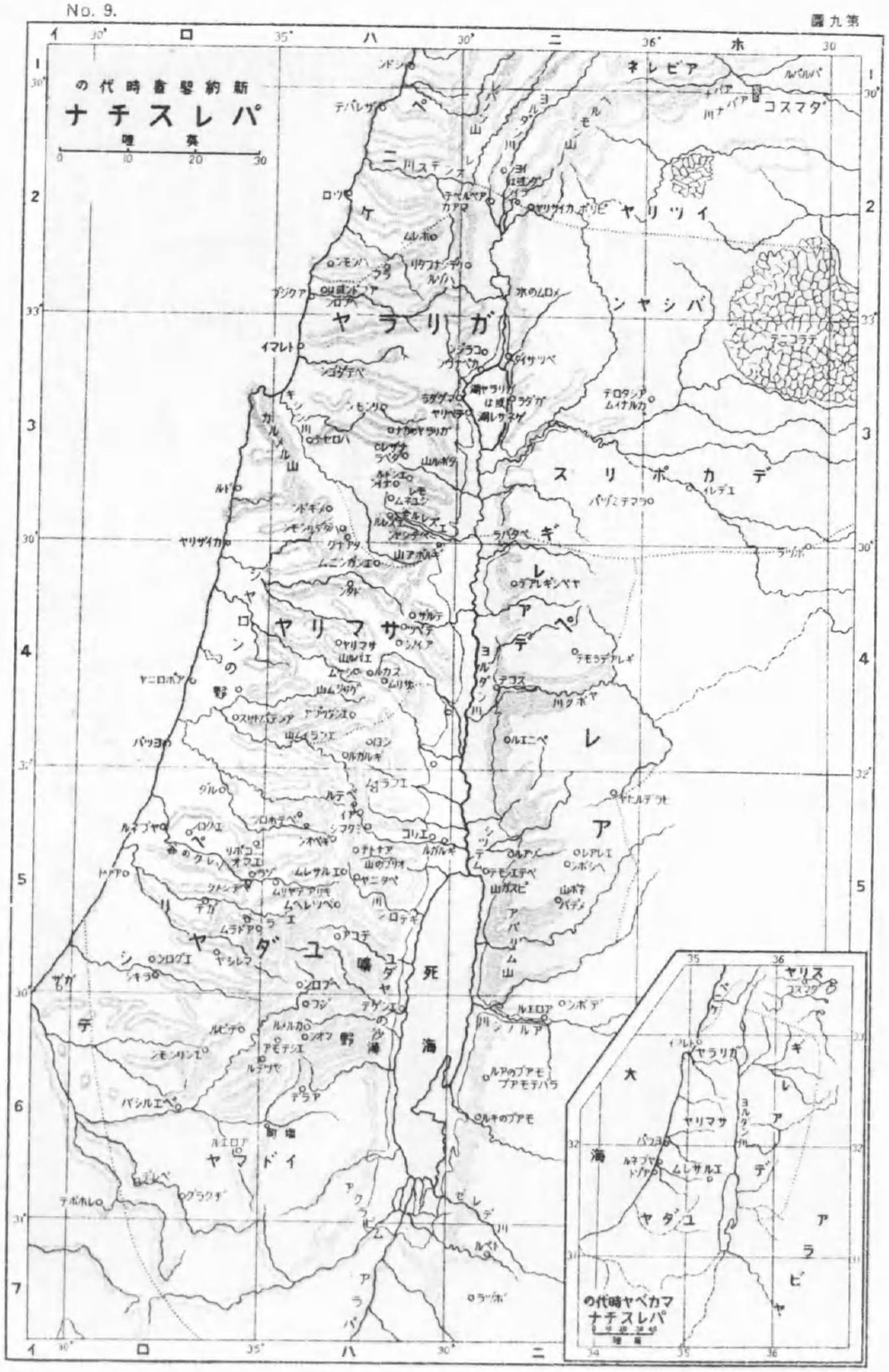


No. 7.



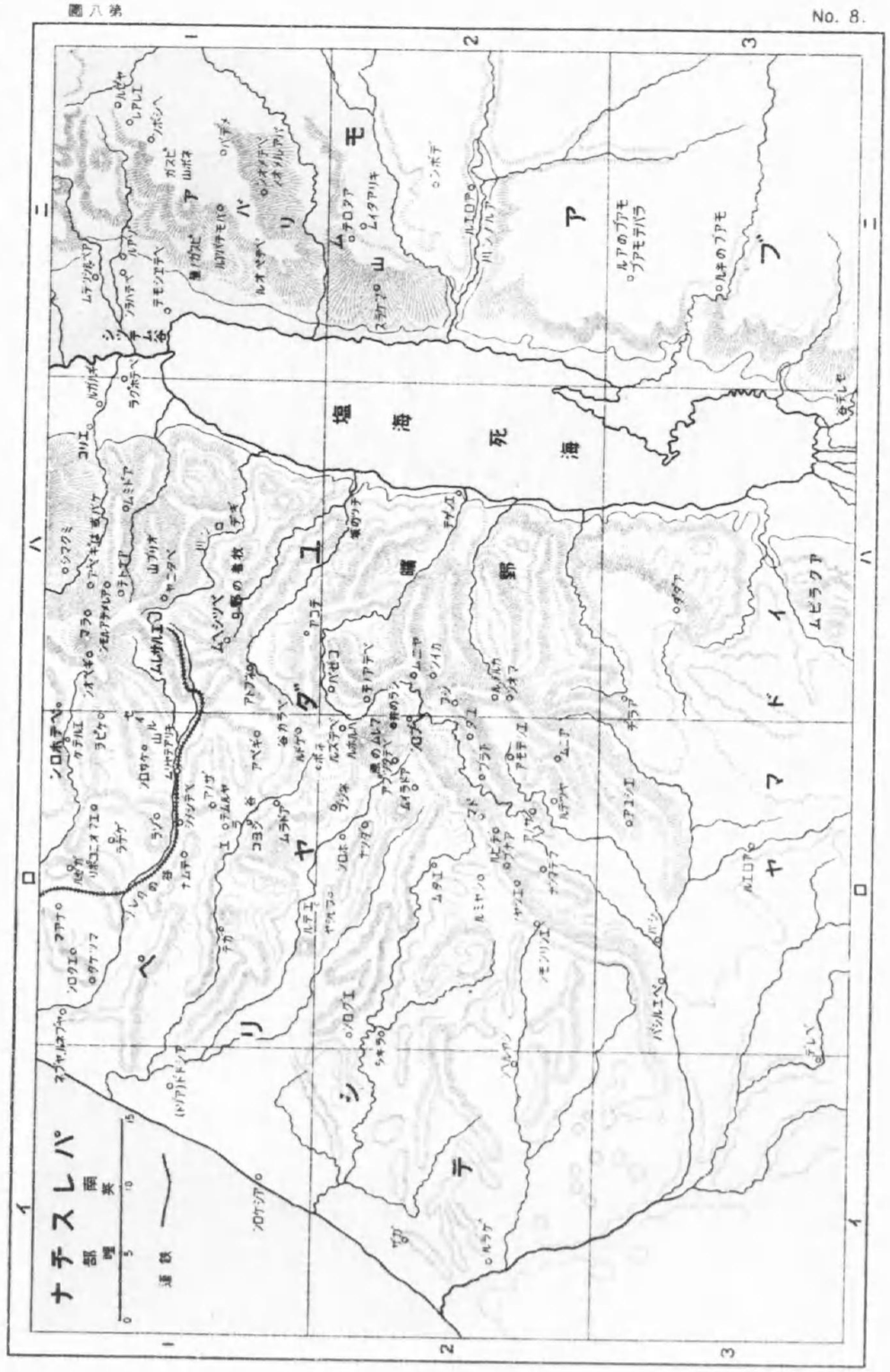
No. 9.

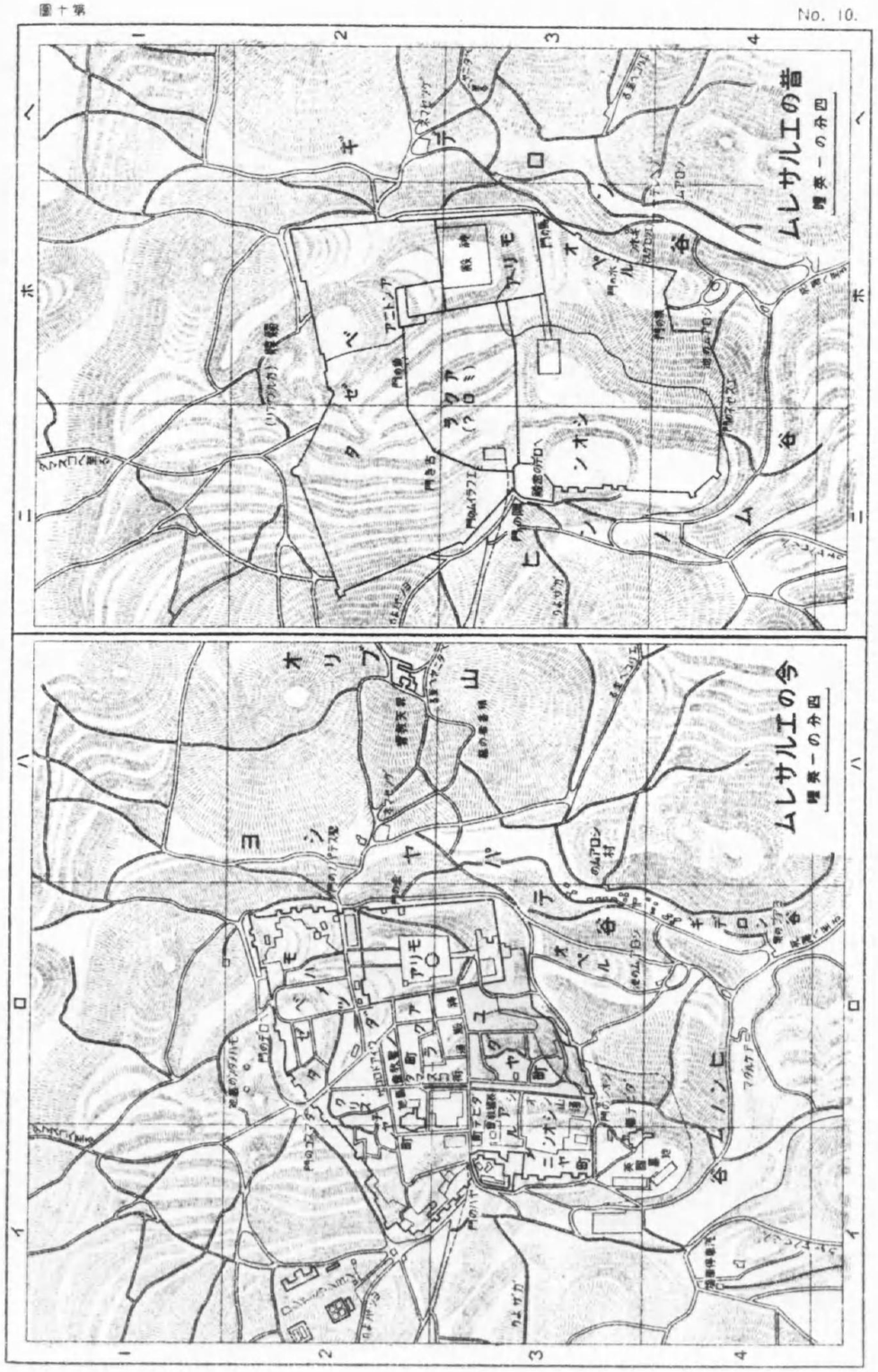
第九圖

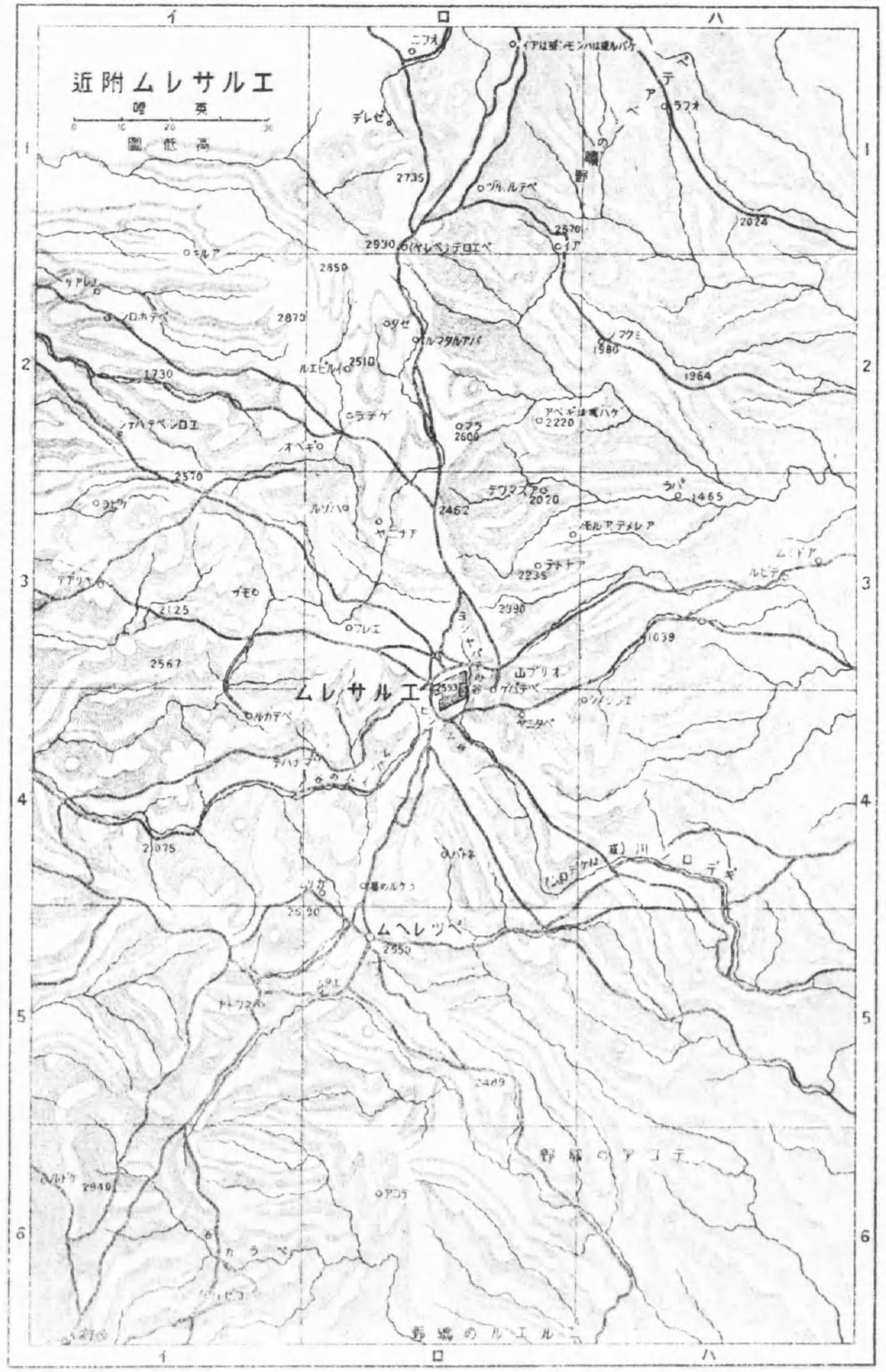


第八圖

No. 8.




ムレサル工の昔
噴泉一の分圖
ムレサル工の今
噴泉一の分圖


近附ムレサル工
噴泉
圖低高
ムレサル工
ムヘレツペ

露光量違いの為重複撮影

昭和二年八月二日印刷
昭和二年八月五日發行

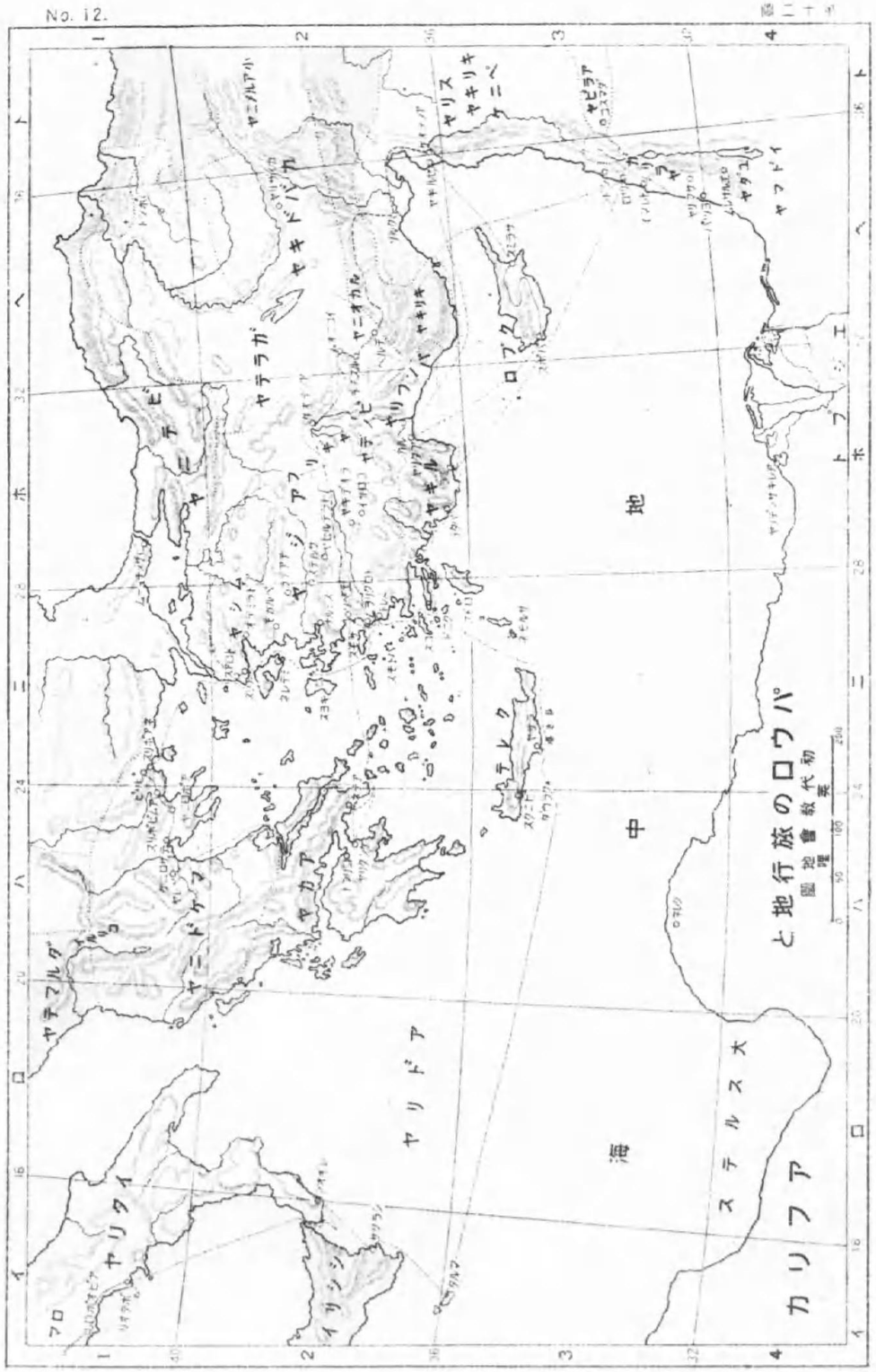
發行者　東京市京橋區銀座四丁目一番地　米國人　ケー、イー、アウレル

發行所　東京市京橋區銀座四丁目一番地　米國聖書協會

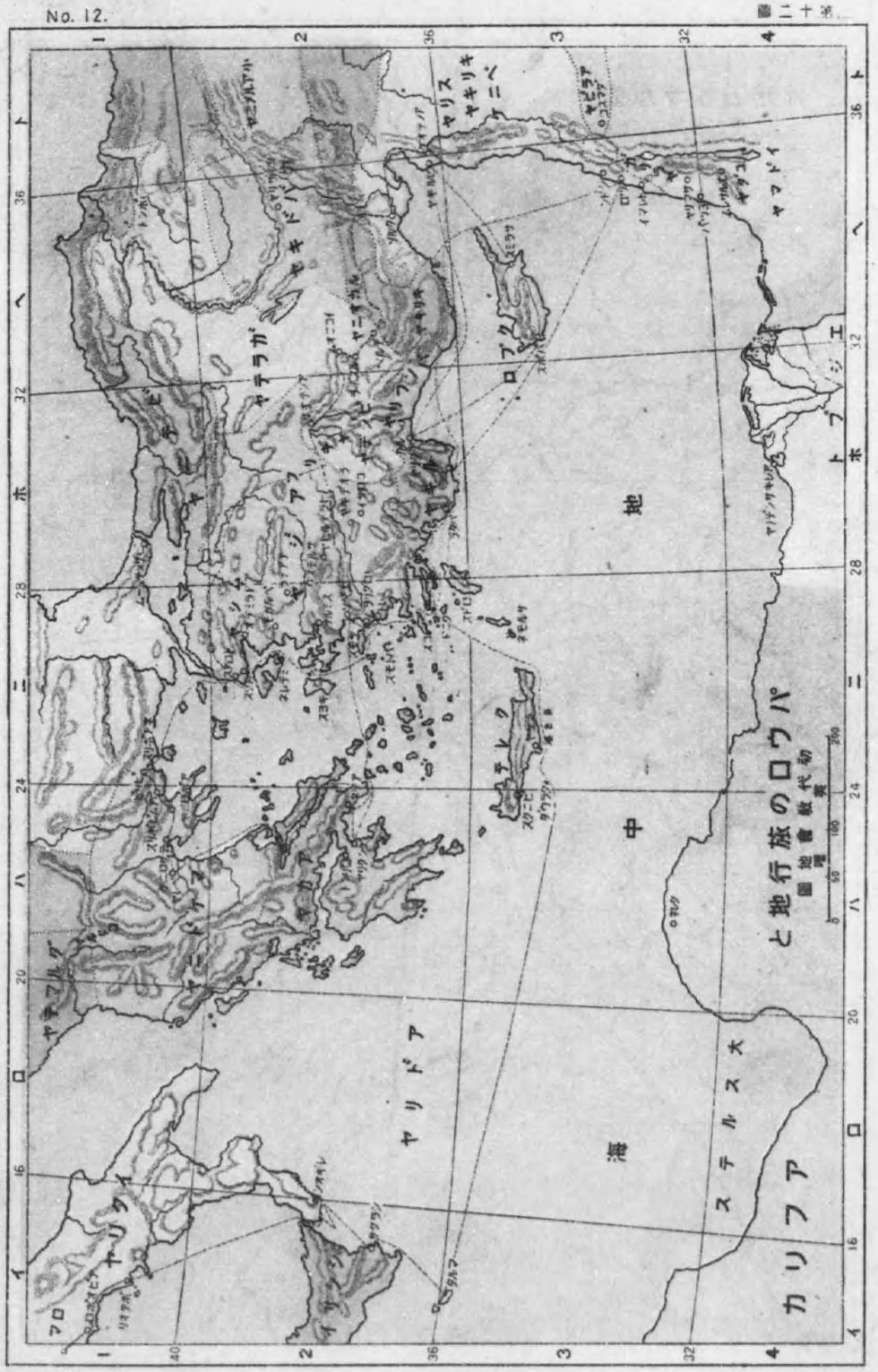
印刷者　東京府王子町堀ノ内八百三十五番地　折坂友之

印刷所　東京府王子町堀ノ内八百三十五番地　星光印刷合資會社

不許複製



露光量違いの為重複撮影


No. 12.
第二十圖
カリフォルニア
ステルス大
津
ヤリドア
中
地
ロブク
ヤキドノ
ヤキリス
ヤキリキ
ケニン
ヤテラガ
ヤキルグ
ヤリタイ
ヤキルグ
ヤキルグ
ヤキルグ

終